

博物学とツーリズムの結合にみる政治性

20 世紀初頭オーストリア社会民主党「自然の友」協会の選択

古川 高子

目次

はじめに

1. 他党との協力から対立へ—社会民主党の1908年から1911年における転換点—

2. フライデンカーの思想

3. 「自然の友」協会のツーリズム—博物学との結合

4. ツーリズムと博物学結合の意味

おわりに

はじめに

「1910年1月1日にヴィーン支部では博物学部門を設立することになりました。毎週金曜日午後8時から9時半まで次のようなプログラムで授業を行います。1月7日地質学と鉱物学の講義、1月14日植物学講義、1月21日動物学講義、1月23日（日曜日）はカーレンベルクへ植物観察遠足を行います。朝9時半にヌスドルフの旅館「ローゼ」の前に集合。帰りは4時から4時半になります。所持品は大きなメモ帳か小さなスケッチブック。会員はボタン穴に徽章をつけること。1月28日総合科目。講師は支部リーダーのゲオーク・シュミードゥル。入門希望

者は文書または口頭で事務局に申し込んでください」¹。

この記事はどこかの初心者向け自然科学サークルの話ではない。インスブルック近郊の高山に避難小屋をもつツーリスト協会²の会誌に掲載されていたものである。今日では登山協会といえは高山への登山やクレタリングなど高度な技術向上のためのスクールや時間を競う競技登山の主催などがその活動の中心である。もちろん、登山をする際に山や森の自然観察を行い、自然に親しむことも通常行われている。しかし、上記の協会が行ったのは、労働者向けの本格的な博物学の講義であった。ツーリスト協会「自然の友」はこの時期に、なぜ博物学部門を立ち上げたのだろうか。登山と博物学を結びつけることにはどのような意味があったのだろうか。

もともと、博物学という学問は18世紀後半のイギリス、啓蒙主義時代の人々の好奇心から、自然界にあるさまざまなもの、鉱物、植物、昆

¹ *Der Naturfreund. Mitteilungsblatt des Touristenvereins „Die Naturfreunde“*, 1909, Nr. 12, S. 279. この『自然の友』誌は97年7月発刊。1916年8月号まで毎月発行、以後は隔月発行。以下、NF.と略記する。

² ツーリスト協会やツーリズムについては、第三章参照のこと。

虫などを観察・収集するところから始まっている。博物学はアマチュアも携わることができる学問であったため、19世紀にはアマチュア学者が出現し、最初は上層の紳士からなる野外クラブ、やがては女性や徒弟なども加わる同様なクラブが設立されるようになった。これらのクラブは、野外観察のために遠足や登山を行っている³。それゆえ、登山を主として行うツーリスト協会でこうした博物学の講義が行われるのは、当然のようにも考えられる。だが、「自然の友」協会による博物学部門の設立には、オーストリア社会民主労働者党⁴の組織であった「自然の友」が党の国民社会への統合政策に応じて行った一つの選択という意味があったのである。それは、同時に登山に関する便宜を受けているブルジョワツーリスト協会との友好関係をも維持するためになされたことでもあった。

この選択が行われる以前の「自然の友」協会は、労働者の組織化という党の本来的な目的遂行にはあまり関心がなく、むしろ「非政治的」であることを標榜するブルジョワツーリスト協会と共に登山活動を行うことを望んでいた。もちろん「自然の友」協会に全く政治性がなかったというわけではない。例えば、登山者の利害

を護るために政治家を利用している。1906年秋、登山やハイキングのための山道が、山林の所有者により通行禁止となるケースが増え、登山者が山から締め出される事態となった際、「自然の友」協会員である社会民主党の国会議員を利用して帝国議会で質問をさせている。そして、機関誌に「禁止された道」⁵という特集を組み、その質議の状況を詳細に報告し、山林所有者である貴族・修道院・大ブルジョワジーによる「自然の占有」を開放すべきことを訴えた。そればかりではなく、同じ利害関係をもつブルジョワツーリスト協会員とともに、通行止めの道に入りこみ、山林保有者に抗議をし、それでも解決されない場合は、裁判に持ち込むことまでおこなった。こうして支配層の権力に立ち向かっていったのである。オーストリア＝ハンガリー二重君主国においてはじめて男子普通選挙が施行された時期とも重なり、自分たちの登山や自然享受の「権利」を主張したのであった。

ところが、博物学部門の設立以後の時期になると、「自然の友」協会の立ち向かう相手に変化する。すなわち自ら社会民主党の組織であることを主張し、競合する大衆政党、キリスト教社会党とドイツナショナル⁶（＝国粋主義）を敵と

³ 参照、D.E. アレン（阿部治訳）『ナチュラリストの誕生 イギリス博物学の社会史』（平凡社、1990、原著1976）、117-136、253-280頁。

⁴ 本稿で用いる社会民主党という言葉は、ドイツオーストリア社会民主党を指す。その正式名は、オーストリアにおけるドイツ系社会民主労働党 *Deutsche sozialdemokratische Arbeiterpartei in Österreich* である。また、チェコスラヴ社会民主労働者党と比較する場合はドイツオーストリア社会民主党と表記する。

⁵ 『自然の友』誌1906年9月号から1919年7/8月号まで掲載された連載。詳細は拙稿『「自然」による啓蒙-20世紀初頭オーストリア『自然の友』協会の活動から』『*Quadrante*-クアドランテ（四分儀）-地域・文化・位置のための総合雑誌』（4）2002、292-294頁を参照のこと。

⁶ ここでいうドイツナショナルは、ハプスブルク二重君主国内で19世紀最後の四半世紀に生ずるドイツ系住民の国民的統合を図ろうとする運動で「ドイツ人」の文化的成果や経済的貢献を擁

するようになるのである。だが、資金も乏しく避難小屋を多くは所有できない「自然の友」が、登山に関して便宜を受けていたブルジョワツーリスト協会の多くは社会民主党とは対立する大衆政党やドイツナショナル系のブルジョワ政党に属していた。したがって「自然の友」としては、党とブルジョワツーリスト協会との二つの関係を維持するための戦略を考える必要があった。その苦肉の策が博物学部門の設立だったのである。

「自然の友」協会が行ったこの選択は、二重君主国内に存在した文化協会が、社会民主党による国民社会形成運動に繰り込まれることによって引き起こされた、かれらの政治的権力に対する意識の変化を示すものである。しかし、ラーガー⁷の対立が激しくなる戦間期まで考察の射程を広げると、また、別な面も浮かび上がってくる。「自然の友」協会の指導層は、社会民主党のスポーツ・文化政策の中心となる「オーストリア労働者・スポーツ団体連合(VAS)」⁸や「オ

ーストリア労働者スポーツ・身体文化同盟(ASKÖ)」⁹の幹部となり、活動を担っていく。それにもかかわらず、敵対するブルジョワツーリスト協会との関係も続けるのである。この点を考慮すると、「自然の友」は、表層でこそ社会民主党の国民社会化・陣営統合政策に、繰り入れられたようにみえるが、それに抗する動きもおこなっていたといえそうである。

本稿の目的は、このような方向性をもっていた「自然の友」協会がおこなったはじめての政治的意思表明の意味を明らかにすることである。そのために、ここではツーリズム活動を行う組織として他のブルジョワツーリスト協会との関係を重視しつつ、社会民主党による国民社会への統合化政策に応じて、博物学の学習とツーリズムを結合させた過程をまず、考察する。

そこで、「自然の友」協会の成りたちを説明してから、研究史を整理し、本稿の立場を明確にする。

「自然の友」協会とは

1890年代、オーストリア＝ハンガリー二重君主国内では1873年の不況を経て、自由主義政権から保守政権への移行や銀行や企業の再編統合と第二次産業革命が進行する一方で、1870年代からの長期にわたる農業不況により、山・農村から都市部へと急速な人の移動が起こっていた。首都ウィーンでは、1890年代に人口が約34万

護し、「ドイツ人」を統合の指標とする国粹主義的運動を担った人々を指し、ドイツとの結合を主張し、「アーリア条項」を設けて、反ユダヤ主義を標榜する諸組織もあった。ドイツナショナル連盟やドイツ人民党からなる。参照、小沢弘明「第六章 二重制の時代」南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』（山川出版社、1999）、238-239頁。

⁷ 19世紀末、二重君主国内ライタ以西でキリスト教社会党、ドイツナショナル、社会民主党の三つの大衆政党を中心に大衆を政治に繰り入れ、国民社会を形成していこうとする動きが起こった。これらの社会運動グループは、戦間期にかけて、政治上の組織ばかりではなく、労働組合、消費組合、文化・教育、農工商業の利益団体等といった諸組織、そして住民を、それぞれ自分の陣地に取り込み、小社会を形成していった。それらを陣営＝ラーガーと呼ぶ。

⁸ Der Verband der Arbeiter- und Solidatensportvereinigungen Österreichs (1919-1924).

⁹ Der Arbeiterbund für Sport und Körperkultur Österreichs (1924-1934). 以下、ASKÖと略記する。

人増加し、1900年には177万ちかくなっている¹⁰。急激な都市化・工業化により住宅不足や衛生状態が悪化し、結核などの病気や売春・アルコール中毒などの社会衛生問題が深刻化した。こうして、それまでの自由主義的政策の失敗が明確になったため、社会問題を解決し、一般大衆を政治に繰り入れて統合を図ろうとする大衆政治が出現したのである。それを担ったのが、キリスト教社会党、社会民主党、ドイツナショナルの三つの社会運動グループであった。

他方、大衆政党とは別の立場から社会問題を解決しようとする人々もいた。かれらは「社会政策家 Sozialpolitiker」と呼ばれ、資本主義経済の枠内で自由で平等な進歩的政治を実現し、ブルジョワジーの自由は最貧困層を救済するために制限される必要があると考えていた人々である。かれらはイギリスのフェビアン協会を真似て「ヴィーンフェビアン協会 Die Wiener Fabier-Gesellschaft」を1891年に創設し、機関誌を発行して、主として言説レベルで社会問題を解決しようとした。この協会は、ドイツナショナルや社会民主党に所属する政治家や学校教師さらには、会社や工場の経営者なども会員とするブルジョワ層の協会だった¹¹。

当時ヴィーン市政を担っていたキリスト教社会党は、電気・水道・ガスなどのインフラ拡充

とともに、ヴィーン市の景観整備のため緑地帯の設置、郊外の住宅建設、市近郊の山野への往来を盛んにするための市電敷設といった事業を行った。しかし、「美と健康」を謳ったその政策は、最貧層のための安価な住宅の供給などを意図したものではなかったため、社会問題の解決策としては、自ずと限界があった¹²。こうした状況のなかで、社会民主党員でもあり、フェビアン協会会員でもあった小学校教師シュミードウル Georg Schmiedl とその山歩き仲間が、心身によいヴァンダーン Wandern/Wanderung (=遠足・ハイキング・徒歩旅行)や登山を労働者¹³に広め、かれらの健康の維持・改善をしようとして一つの遠足・ツーリスト協会を設立した。それが「自然の友」協会 Der Touristen Verein “Die Naturfreunde”である。

この協会は、設立5年で会員数を10倍に伸ばし、1914年には3万人を越える大きな組織となった。支部設立を熱心に行う会員の活動や労働者の移住に伴い、1905年から支部はスイスやドイツへも広がり、1912年にはロス・アンジェルスにも支部が設立される。1930年には総会員数はオーストリアで20万人を越えたが、1934年キリスト教社会党の教権主義的独裁政権により

¹² John W. Boyer, *Culture and Political Crisis in Vienna. Christian Socialism in Power, 1897-1918* (Chicago/London, 1995), pp. 11-12.

¹³ 「自然の友」協会の会員は当初、金属工や印刷工などの職人層、商店や会社の勤労者、さらには自らを「労働者」とみなす知識人たちも含まれていた。会員に工場労働者が増加するのは、戦間期に労働者保護諸法が制定・改定されて8時間労働や有給休暇などが一般に普及してからである。

¹⁰ Peter Csandes/Ferdinand Oppl (Hrsg.), *Österreichisches Städtebuch. Die Stadt Wien* (Wien, 1999), S. 70.

¹¹ Albert Fuchs, *Geistige Strömungen in Österreich 1867-1917* (Wien, 1949. Nachdruck; 1978), S. 141-142.

解散を余儀なくされた。その後、第二次世界大戦を経て、再びウィーンに本部が置かれ、登山などのアウトドアスポーツ、自然保護や救援活動を行い、現在まで存続している。

研究史

このような「自然の友」協会についての学術的研究は、協会史を中心に、自然思想、自然保護活動、およびそれらのナチスとの同質性などについてなされてきた¹⁴。それぞれ「自然の友」協会の特徴を明らかにしてはいたが、それらはあくまでも社会民主党労働者運動内の文化組織としての「自然の友」協会の分析であり、「自然の友」を取り巻く社会の動き、人的繋がりや社会民主党の政策、ブルジョワツーリスト諸協会との関係において「自然の友」を考察するものではなかった。したがって、これらの研究は、「自然の友」協会が設立され、存続した社会、二重君主国内で諸国民体¹⁵が対立し、大衆政党による国民社会化が行われつつあった社会において、かれらが自らの活動目的を遂行し、他の諸団体との協力・競合関係のなかで生き抜いていくためにどのような思想・言説を用いたのかということは教えてくれないのである。

そうした「自然の友」協会についての研究に欠けていた点を補う上で、良い視点を示唆して

くれたのが、同時期のオーストリア労働者サッカーを扱ったマルシックの研究¹⁶である。かれは、スポーツを社会から見る視点を持ち、経済・資本、メディア、社会民主党とオーストリア労働者サッカー協会自由連合との関係を描いている。もともと自由連合は社会民主党の組織ではなく、連合に属する個々の労働者サッカークラブがブルジョワ側につくか、社会民主党側につくかの選択がなされていった。しかし、社会民主党によっては、この自由連合はなかなか統合されず、他の労働者スポーツ連合が党の政策を受け入れたなかで、唯一1926年まで、ブルジョワサッカークラブとの試合を続けていた。この点に着目して、マルシックは、労働者サッカーが激しくまた長期間にわたって党の政策に抗したのは、選手のプロ志向、集客の必要性から資本やメディアの力がスポーツに与える影響などがあったからだとした。

このような視点から「自然の友」を考察すると次のようなことがわかってくる。「自然の友」協会は既に社会民主党の組織となっており、その意味では社会民主党には統合されていた。むしろ党の文化・スポーツ政策の中心になって活躍している。よって、ブルジョワツーリスト協会とは対立しているように見えてはいる。しかし、それにもかかわらず、底辺ではブルジョワツーリスト協会との関係を続けていたのである。

¹⁴ これらの研究史については拙稿『「自然」による啓蒙-20世紀初頭オーストリア「自然の友」協会の活動から』、271-272頁を参照のこと。

¹⁵ ここで国民体というのはnationalityの訳語で、二重君主国において、国民社会を形成する途上にある諸民族を指す。この訳語は小沢弘明『ハプスブルク帝国末期の民族・国民・国家』『国民国家を問う』(青木書店、1994)、70-86頁の用法を踏襲している。

¹⁶ Matthias Marschik, »Wir spielen nicht zum Vergnügen.« Arbeiterfußball in der Ersten Republik (1994, Wien).

資本や産業の影響は、登山にも及んでおり、それが政治的統合を緩めた要因の一つになっていた。例えば、山に登るという行為は基本的に都市民のリクレーションであり、かれらが山地に出向くにあたって、鉄道を利用し、旅館や避難（宿泊）小屋に宿泊する必要がでてくる。そうした行為に伴う経済効果が山間地域にもたらされるというツーリズムによる経済発展の要素を有していた。そのため、「自然の友」も含めてツーリスト協会は客として相互の協会会員を受け入れ続けたのである。しかし、サッカーの場合同様とは異なり、経済的なものばかりではなく、「自然の友」の場合には、登山というスポーツに内在する特徴も、社会民主党の統合政策に抗する要因となっていた。遭難の際の救援には、政治的信条の相違に関わりなく、遭難現場の近くに支部を持つ協会が中心となって行動した。これを「自然の友」とブルジョワツーリスト協会が協同で行う場合もあれば、互いの会員を別の協会会員が助ける場合もあった。また、踏破が難しいと言われる山には、登山能力という点やかかつて築いた登山仲間という結びつきから協同で登っている。つまり、経済的要因だけに還元されないスポーツ自身に内在するものや人的結合のレヴェルに政治的統合に抗するものがあったということである。

こういう点を考慮すると、政治的対立や政党による国民化運動がどこまでなされていたのか、ということ、つまりそれらの限界を考えざるを

得なくなるのである。それを明らかにしたのが、アメリカ合衆国のオーストリア史研究者ジャドソンによる二重君主国からオーストリア共和国に至る時期の言語境界地域における地方社会の研究¹⁷である。ジャドソンは、ドイツナショナルの諸協会が地方社会の国民化を目指してツーリズムを利用しながら、地方の経済的發展をおこない、地元の人々の関心を集めようとしたが、かれらは経済發展こそ歓迎したが、ドイツナショナルによる国民化に応じなかったことを明らかにした。結局、こうした状況は戦間期に至っても続いていたという。この点から、ドイツナショナルの場合は、地方の経済發展により、地元民の関心を買うことができたが、「自然の友」の場合はむしろツーリズムによる経済發展が、党の統合に抗する要因を生んだということがいえるだろう。

ジャドソンの扱ったドイツナショナルの諸協会は、シュタイヤーマルクの南方、南ティロール、南バーメンといったドイツ系とそれ以外の住民が混住する地域を中心に活動した。そうした地域は、しかし、社会自体が相互の住民の共同性から成りたっていた。そこにドイツナショナルが進出しても国粋主義化することができない要因があったのである。つまり「自然の友」

¹⁷ Pieter M. Judson, *Nationalizing Rural Landscapes in Cisleithania*, in: (ed.) Nancy M. Wingfield, *Creating The Other: Ethnic Conflict and Nationalism in Habsburg Central Europe* (New York/Oxford, 2003), pp.127-148; Pieter M. Judson, *Guardians of the Nation. Activists on the Language Frontiers of Imperial Austria* (Cambridge/London, 2006).

が登山における仲間的共同性のゆえに、党の統合政策に抗した点と同じレベルでの抵抗があったということである。

しかし、ジャドソンの扱ったドイツナショナルの諸協会と「自然の友」とは協会の設立過程の点において相違があった。前者の場合は、最初からドイツナショナル諸党による国粋主義的国民社会化の目的に即した活動を行っており、政党とその文化協会の方向性は一致していた。つまり、言語境界地域における国民化に関する研究は、地域の住民対ドイツナショナルの協会という構図で描くことができるのである。

だが、「自然の友」協会は社会民主党員により設立されたが、当初は党の政策を率先して遂行するような性格は有していなかった。登山活動が行われる休祭日は、組合や党の活動も行われるが故に、党幹部からは党活動を疎かにするものだ、と設立自体を反対されている。社会民主党の政治家を介して党の組織として認められたとはいえ、その後も後々まで党活動を行わないで山にばかり登っている、と批判されている。そして、「自然の友」の指導層は党内では右派やブルジョワ層に属する人々からなっていると見なされており、党内の左派からは批判される存在であった。ドイツナショナルの組織との交流もあり、またそれに与する作家を尊重している。さらに、当時、ドイツナショナルであると見な

されていたブルジョワツーリスト協会¹⁸との関係をとても重視していた。というのも、登山を行う上でさまざまな便宜を受けることができたからであり、それを外しては活動することはできなかったからである。但し、これらのブルジョワツーリスト協会のほとんどは、ドイツナショナル系組織であるとはいえ、教養市民層らによって設立され、その流れを受けた文化協会であったために、「非政治的」であることを主張した。それにしがった「自然の友」協会は積極的な政治活動は行わず、ツーリストとしての活動だけを行うことを是としている。よって、「自然の友」協会は社会民主党との関係よりもむしろ、ブルジョワツーリスト協会との関係を重視した活動をおこなうことになるのである。1907年の普通選挙施行の前後には、社会民主党の政治家を利用するが、これはむしろ、登山家の利害を主張したものであった。

ところが、本格的な大衆政治の時代に入り、党からの組織化・統合化の圧力が強まったことで、「非政治的」な「自然の友」協会が、党の政策を協会内で実施すべく動きはじめる。そこで、自分たちの協会が社会民主党の協会であるという主張を開始するのである。とはいえ、登山の際に必要なブルジョワツーリスト協会との関係を壊さないような配慮を行っており、第一次世界大戦後、二重君主国からオーストリア共和国

¹⁸ Cf. Rainer Amstädter, *Der Alpinismus. Kultur-Organisation-Politik* (Wien, 1996).

へと移行してもこの関係は変わらない。とはいえ、戦間期は社会民主党がウィーンの市政を執り、また国会議員の会長が生まれたことなどが重なり、「自然の友」協会と党との関係が強化されていく。ラーガー間の対立も激しくなり、ドイツナショナル側に立つブルジョワツーリスト協会との対抗争いは表面化する。ブルジョワツーリスト協会は、自ら所有する避難小屋の割引料金を「自然の友」協会には適用しなくなり、小屋に「ユダヤ教徒と赤（＝社会民主党员）はお断り」の看板を掲げ、「自然の友」協会員を排斥する動きをみせる。しかし、前述したように、ドイツナショナル側のブルジョワツーリスト協会との関係は断絶するわけではなく、「自然の友」の小屋はあらゆる登山者に開かれており、ブルジョワツーリスト協会の小屋も「自然の友」は利用していた。その関係は1932年まで続いている。

こうした状況を考慮すると、「自然の友」協会は、一方では社会民主党の政策やそれを通した国民社会化に応じる様子をみせながら、実際は、それに抗った方向を有していた、と見なすことも可能であろう。だが、二重君主国時代から続いているブルジョワツーリスト協会との関係を保ち続けたことは、以前からのドイツナショナルとの繋がりをそのまま維持し、ドイツナショナルラーガーに与したものではないか、という疑問もわく。しかし、ドイツナショナルのブルジョワツーリスト協会は、第一次世界大戦後

徐々にアーリア条項を導入し、ユダヤ教徒を排除するが、「自然の友」は追い出されたかれらを協会に受け入れていた。よって、政治的にドイツナショナル化したともいえないのである。

本稿はジャドソンの視点、つまり戦間期に至ってもオーストリアにおいて、地方社会の国民化はなされなかった、という見方に則るものである。但し、ジャドソンの研究とは異なり、「自然の友」協会の場合、ウィーン本部を中心に分析をすすめるを得ない。というのも、現在のところオーストリアにおいて明らかになっている史料が限定されているからである。「自然の友」協会に直接関係するものは、機関誌『自然の友』、全支部が集まる協会大会の議事録、および数年間のウィーン支部のニュースレター、ウィーン近郊のフロリッツドルフの短い地域史のみである。とはいえ、『自然の友』誌に各支部の報告が掲載され、二年に一度開催された協会大会では諸支部の動向がわかり、ブルジョワツーリスト協会との関係は、機関誌の細部に掲載されている。また、編集長ハピッシュ Leopold Happisch がその創刊時から最後の号までの約38年間、全て一人で責任を負って出版した『自然の友』誌は、権限が強かったウィーン本部が世界各国に広がった全支部に向けて発したもので、協会本部によるそれぞれの時期の意向や方向性が誌面に表れていると考えられる。したがって、地方社会の様子を克明に描くことはできなくとも、社会民主党の新聞・雑誌、ならびに

ブルジョワツーリスト協会についての史料をも利用することにより、党の動きとは異なる傾向があったことは示せるはずである。

本稿はこのような方向性をもっていた「自然の友」協会が、他のブルジョワツーリスト協会を配慮しながら、1908年からの社会民主党の国民社会統合策に応じ、博物学の学習とツーリズムを結合させて、その政治的意思表明を明確にした時期を扱うことにする。それは「自然の友」が党の動きにしたがうようにみせながら、ブルジョワツーリスト協会とも歩調をあわせようとしたはじめての行為だった。

以下、第一章では1908年から1911年にかけておこった社会民主党の政策上の変化を整理し、第二章で博物学の学習の基礎になったフライデッカーの思想を採り上げる。第三章ではツーリズムについて説明し、1909年秋から明確になっていく「自然の友」協会での方針や活動上の変化に言及する。第四章において、「自然の友」協会がブルジョワツーリスト協会と社会民主党の双方への対策として、博物学の学習とツーリズムを結合させる、という方向性を選択した意味を検討する。

1. 他党との協力から対立へ—社会民主党の1908年から1911年における転換点—

1.1 ラーガー批判

1880年代後半から90年代にかけてキリスト教社会党、社会民主党およびドイツナショナル

の諸党を中心に、各種の組織を統合し、大衆を政治に繰り入れようとする運動が開始された。

これら三つの運動がそこに属する人々の生活のあらゆる側面を引き受けるようになり、戦間期の社会はこのラーガーの対抗対立関係によって分裂をきたした¹⁹、というのがオーストリア史における通説であった。

戦間期以降に重心を置くヴァンドゥルスツカにより提示されたラーガー対抗の構図に対して、第一次世界大戦前には三つのラーガーは密接な結びつきを有していた、とする批判が地域史や文化史、宗教史の分野から提出された。コーエンは、1896年社会民主党の支部組織がプラハにできるまでは、下層ドイツ系住民の支持を獲得する際、唯一ドイツナショナルがリベラル²⁰と抗争可能な存在であったことを指摘し²¹、またハーニッシュは、ザルツブルクのように、反教権主義が社会階級の対立よりも強かったところでは、ドイツナショナルと社会民主主義者が連

¹⁹ Adam Wandruszka, *Österreichs politische Struktur. Die Entwicklung der Parteien und politische Bewegungen*, in: H. Benedikt (Hrsg.), *Geschichte der Republik Österreich* (Wien, 1954), S. 289-485. ヴァンドゥルスツカは三ラーガーの根本を辿るとそれらの運動がより強く密接に絡み合っていたことを指摘し、そのリーダーたちが80年代初めには同じサークルにいた、ということ述べているが、それから第一次世界大戦敗戦後までの政治的社会的関係については言及していない。

²⁰ 19世紀60年代末から70年代にかけて二重君主国でも立憲政党による政治が行われ、これを担ったのがブルジョワの自由主義者＝リベラルたちであった。かれらは財産と教養を持ち、自立して生計を立てていける能力があり、ドイツ語・ドイツ文化を受容しさえすれば、だれでもドイツ人になれると考えられていたが、他の国民社会形成の動きに伴い、かれらも対抗してドイツ系の国民社会形成運動を担っていく。

²¹ Gary B. Cohen, *The Politics of Ethnic Survival: Germans in Prague, 1861-1914* (Princeton, 1981), p. 217.

携して、キリスト教社会党に対抗していた、と述べている²²。そればかりでなく、シュテガーは、1899年から1910年に至るまで各地で社会民主党とドイツナショナルが組んで、キリスト教社会党に反対するデモや集会を開いており、また帝国議会議員選挙の決戦投票の際にも、グラーツやヴィーンでは、キリスト教社会党に対して、ドイツナショナルの票を社会民主党が獲得し勝利したことに言及している²³。

さらに、ボイヤーは、キリスト教社会党の動きを詳細に追いながら、第一次世界大戦前の諸大衆政党は、チェコ語学校への助成金支出に関して、ドイツオーストリア社会民主党がキリスト教社会党と組んでチェコスラヴ社会民主党に反対し、その動議を挫折せしめるといったように、問題の質によって同じ政党内でも離合集散を繰り返していたことを指摘している²⁴。

これらの議論からすると、少なくとも1910年までは、社会民主党はキリスト教社会党に対抗するために、常にではないが、ドイツナショナルと協力し、問題の質によっては、キリスト

教社会党とも結んで活動することがあった、ということになる。では、1911年にかけてどのようなことが起こったのだろうか。

1.2 1910年前後からの社会民主党

1.2.1 組織力の強化

1907年5月帝国議会議員選挙が男子普通選挙としてはじめて施行された。それまで大きな勢力であった大土地所有者やブルジョワジーの議席は社会民主党、青年チェコ党などに奪われ、激減した。社会民主党は議席516のうち87議席を獲得し、議会で最大の政党となった。とはいえ、領邦議会や地方自治体の議会ではこれまでと同様のクーリエ制がしかれており、1860年代後半からの自由主義勢力の後継であるブルジョワジーのナショナル派が権力を握っており、大衆政党が地方まで勢力を伸ばし統合を進めようとする政策はなかなか進まなかった²⁵。

そこで社会民主党は1911年の第二回普通選挙での勢力拡大を目指して、組織化・統合政策を強化する。権力を中央に集中させる方向で組織改編が行われ、全体党の立場強化や基盤組織の規律化が進められるのである²⁶。その際、重視されたのが、党員の質を上げるための社会主義学習を含めた一般大衆向け教育政策強化の方針であった。この政策は1909年9月末ライヒェンベルク党大会において示される。党によるこ

²² Ernst Hanisch/ Ulrike Fleischer, *Im Schatten berühmter Zeiten. Salzburg in Jahren Georg Trakls, 1887-1914* (Salzburg, 1986), S. 64-65; 邦訳、植和田光晴『広く知られし時代の蔭に ゲオルク・トラークルの時代のザルツブルク』(三修社、1995)、60-61頁。

²³ Gerhard Steger, *Rote Fahne. Schwarzes Kreuz. Die Haltung der Sozialdemokratischen Arbeiterpartei Österreichs zu Religion, Christentum und Kirchen. Von Hairfeld bis 1934* (Wien 1987), S. 189-191.

²⁴ Cf., Boyer, pp. 211-235. また最近では、ソーブJ. Thorpeがザルツブルクの地域レベルでは、三ラーガーの対立というよりも、より流動的な政治文化が支配的であったということを述べている(Julie Thorpe, *Provincials Imagining the Nation. Pan-German Identity in Salzburg, 1933-1938*, in: *Zeitgeschichte*, 33 Jg., Heft 4, Juli/August, 2006, pp.179-198)。

²⁵ 小沢弘明『第六章 二重制の時代』南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』(山川出版社、1999)、252-253頁。

²⁶ Wolfgang Maderthaner, *Das Entstehen einer demokratischen Massenpartei*, in: ders./ Wolfgang C. Müller (Hg.), *Die Organisation der Österreichischen Sozialdemokratie 1889-1995* (Wien, 1996), S.52-53.

の組織化は、それまであった労働者教育・文化組織をまとめて体系化することでもあり、それが政策の一環となっていた。1908年、それまでの文化・教育組織がダーネベルク Robert Danneberg 率いる「教育のための中央局 Die Zentralstelle für das Bildungswesen」へと改組され、そこを中心に組織化が図られたのである。ライヒェンベルク大会での労働者教育重点化宣言を受け、1909年秋ダーネベルクにより、地方進出を目的とする党員の社会主義教育強化策が打ち出された²⁷。研究史で言及したマルシックも、この1910年前後の時期に、戦間期の社会民主党の教育文化政策を描いたヴァイデンホルツァーによって示された労働者教育の発展段階論を用いて、労働者教育の組織的専門化の局面が終結し、システムティックな組織的活動が形作られつつあった²⁸、と述べている。

さて、1911年6月に、帝国議会議員選出のための第二回目普通選挙が行われ、前年のデモにより大衆の関心を惹きつけた社会民主党とドイツナショナルがともに、キリスト教社会党を押

さえて大勝する²⁹。こうした状況のなかで、票を集めた社会民主党に対抗するために、キリスト教社会党とドイツナショナルが連携を始める。1911年夏、反教権・ドイツナショナルの政治家ツェンカー-Zenker E. Viktor は社会民主党に対抗するためには、教権主義者とドイツナショナルの連携が必要だと訴え³⁰、一方、社会民主党も1911年4月にはキリスト教社会党とドイツナショナルを分かちものはなく、一つの党を形成している、という認識を持つようになっていた³¹。1912年になると、キリスト教社会党側からもドイツナショナルに対する譲歩が示される。三年前にキリスト教社会党の反対で結局は阻止されてしまったコリスコ法³²が春の帝国議会に提出された際、突如キリスト教社会党は同意を示してドイツナショナルと協調し始めたのである。その背後には、失った選挙人たち、とりわけホワイトカラー層を社会民主党から再び奪い返すためには、キリスト教社会党がドイツナショナルと結ぶ必要があるとの認識をもつようになったという理由があった³³。実際、それが功を奏

²⁷ Helg Zottl, Bildungsarbeit der deutschen Sozialdemokratie in Österreich vor dem Ersten Weltkrieg, in: G. Botz/H. Hautmann/H. Konrad/J. Weidenholzer (Hrsg.), *Bewegung und Klasse. Studie zur österreichischen Arbeitergeschichte* (Wien/München/Zürich, 1978), S. 463-466; Dieter Langewiesche, *Zur Freizeit der Arbeiter. Bildungsbestrebungen und Freizeitgestaltung österreichischer Arbeiter im Kaiserreich und in der Ersten Republik* (Stuttgart, 1980), S. 66-71. 党員による巡回講演や地方向けの労働者学校・幹部養成学校などの創設が考案されている。

²⁸ Marschik, S. 21; Josef Weidenholzer, *Auf dem Weg zum >Neuen Menschen<. Bildungs- und Kulturarbeit der österreichischen Sozialdemokratie in der Ersten Republik* (Wien/München/Zürich, 1981), S. 41.

²⁹ 1907年時の議席数を比較すると、キリスト教社会党 98 から 76 へ、ドイツナショナル 79 から 104 へ、社会民主党 89 から 82 へと変化した。Cf. *Geschichte Österreichs in Stichworten, IV Von 1815 bis 1918*, S. 186-189; 小沢弘明「オーストリア社会民主党における民族問題—「小インターナショナル」の解体と労働組合—」『歴史学研究』1987, (572): 33 頁。とくにウィーンでは、キリスト教社会党は1907年より得票数を31,000減らして128,000票、社会民主党は前回より18%増やして146,000票、ドイツナショナル及びブルジョワも15%増加して38,000票を得ている(Boyer, p. 272)。

³⁰ *Arbeiter Zeitung*, 8. 7. 1911, S. 1.

³¹ *Arbeiter Zeitung*, 13. 4. 1911, S. 1.

³² 下オーストリアでは、ドイツ語を唯一の学校での教授語にするという法律。領邦議会では可決されたが、皇帝の認可が下りなかったため、発効しないままであった。

³³ Boyer, pp. 232-234.

して 1912 年のヴィーン市参事会選挙では、21 議席中 11 席をキリスト教社会党が獲得した³⁴。つまり、この 1911 年後半から、反教権という点での社会民主党とドイツナショナルとの連携が崩れ、対社会民主党という点でドイツナショナルとキリスト教社会党が結び始める、という政治的布置の変化が起こったのであった。

1.2.2 チェコスラヴとドイツナショナル派に対する態度

二重君主国ライタ以西のオーストリア社会民主党は 1888/89 年のハインフェルト大会での統一により、諸国民体を包含する政党となったが、1897 年の大会で各国民体別の社会民主党へと組織替えが行われ、ドイツオーストリア社会民主党、チェコスラヴ社会民主党など 6 つの社会民主党から構成されることになった。この党内の連邦化は、社会民主党党首アードラー Victor Adler によって第二インターナショナルを模して「小インターナショナル」と名付けられ、二重君主国内で起こっていた国民体対立の問題は解決されたかのようにであった³⁵。ところが、各国民社会の統合が進むにつれ、とりわけドイツオーストリア社会民主党とチェコスラヴ社会民主党の対立が顕在化した。その一つがチェコ語学校をめぐる問題である。1909 年 10 月に始まる帝国議会の予算委員会でチェコ農民党議員が

提出したチェコ系コメンスキー学校への 10 万クローネ国庫助成金案に、ドイツオーストリア社会民主党は反対し、チェコスラヴ社会民主党は賛成した。それによって社会民主党内での両者の対立が先鋭化する。党内では、チェコ系を同化させるべきか否か、といった議論が展開され、ドイツオーストリア社会民主党のナショナル派（＝右派）は、チェコ系は強制的に同化させるべきであるゆえ、コメンスキー学校への補助は行うべきではない、と主張した³⁶。これに対する左派、つまりチェコやドイツといった国民体の利害よりも階級利害を強調すべきであるとの考えをもつ人々の批判が、1909 年 9 月末のライヒェンベルク党大会において提示された³⁷。ドイツオーストリア社会民主党から示された諸案が、いずれもチェコ系のドイツ系言語文化・社会への強制同化論であったこと、翌 1910 年 6 月の議会で行われたこのチェコ語学校への国庫助成金についての採決で、賛成票を投じたチェコスラヴ社会民主党に対し、ドイツオーストリア社会民主党が、キリスト教社会党とともに反対票を投じたことなどによって、全体党内でのチェコ系とドイツ系の対立が深まっていたのである³⁸。そして、その対立をめぐって 1911 年秋の党大会では、ドイツオーストリア社会民主党

³⁴ Boyer, p. 274.

³⁵ 小沢「オーストリア社会民主党における民族問題」、19 頁。

³⁶ 小沢「オーストリア社会民主党における民族問題」、23-24、33-34 頁。

³⁷ Boyer, pp. 234-235.

³⁸ 小沢「オーストリア社会民主党における民族問題」、23-24 頁；Boyer, p. 234.

内のナショナル派が台頭する。これを経て1912年6月、ドイツオーストリア社会民主党とチェコスラヴ社会民主党は分裂するのである³⁹。こうして1912年には、社会民主党は他の二つの大衆政党との乖離、ナショナリティ問題における党内でのチェコ系との分裂という二重の孤立に直面することになったのであった。

2. フライデンカーの思想

2.1 フライデンカーとは

フライデンカーとよばれる人々は、この世に神は存在しないと考え、キリスト教の神による支配という思想を否定した。そして、世界を自然科学的合理主義によって把握しようとする世界観をもっていた⁴⁰。それは神の代わりに自然の法則 *Naturngesetz* をあて、その法則による支配を説くもので、今生と来世、肉体と精神、神と人間といったように世界を二分法で捉えることを否定する一元論に基づいていた。この信条を持つ人々は、キリスト教信仰から解放されているという理由で、フライデンカー *Freidenker* (= 自由思想家) と呼ばれ、カトリック教会から脱退し、「無宗教」であることを主張した。かれらの世界観は、現実の世界を自然界になぞらえて理解し、そうした世界にこそ秩序が存在すると考えるものであり、「自然の友」協会が置かれた当時のオーストリア社会において支配的であっ

たキリスト教のカトリック信仰に基づく神による支配という世界観に対抗し、またそれを批判する意味をもつものであった。それゆえその会員の多くは社会民主党員が占めていた⁴¹。

オーストリアにおけるフライデンカー運動の礎石となったのは、1869年ウィーンでシュヴェラ *Eduard Schwella* によって設立された「理性の自由教会 *Die Freie Kirche der Vernunft*」⁴²である。これが1887年「ウィーン無宗派協会 *Der Verein der Konfessionslosen in Wien*」となり、1894年にはダーヴィン生誕60周年を記念して「フライデンカー協会 *Der Verein der Freidenker*」と名称が変えられた。

同じフライデンカーでも理論面を重視した人々は一元論同盟を設立し、かれらは一元論者とも呼ばれていた。1909年に設立されたオーストリア一元論同盟は、「国家と教会の分離」「学校教育と教会の分離」を強く訴えた。1919年に「ウィーン文化協会自由同盟 *Der Freie Bund kultureller Vereine Wiens*」が設立されると、フライデンカー協会も一元論同盟とともにそこに参加し、共同して活動するようになっている⁴³。

⁴¹ 社会民主党員の他、フライデンカーに属していたのは、アンチ・カトリックを唱えていたドイツナショナルの諸氏で、代表的なのがドイツナショナルの政治家ツェンカーであった (*Arbeiter Zeitung*, 8. 7. 1911, S. 1)。

⁴² Franz Sertl, *Die Freidenkerbewegung in Österreich im zwanzigsten Jahrhundert* (Wien, 1995), S. 22. 31-54.

⁴³ 「ウィーン文化協会自由同盟」は進歩的ブルジョワによる諸協会の統合体で、一元論にもとづく科学的世界観をもち、「新リベラル」(=社会民主主義的思想)・社会主義的思想を教育や学校において実現しようとする目標をもっていた。シュミードゥルによって設立された社会教育協会、一元論同盟、フライデンカー協会、全オーストリア女性協会、倫理協会「ベライトシャ

³⁹ 小沢「オーストリア社会民主党における民族問題」、33-34頁。

⁴⁰ Steger, S. 231.

「自然の友」協会の指導層である、創設者シュミードゥル、初代会長ロウラウアー Alois Rohrauer、二代会長フォルカート Karl Volkert、ハピッシュそして本稿で論じている「自然の友」の活動方針の変化において大きな役割を演じる教師カラロ Angelo Cararo⁴⁴らはみなフライデンカーであった。シュミードゥルは先に述べたシュヴェラのもとでフライデンカーの思想を学んでおり、カラロは1894年フライデンカー協会の設立協力者に名前を連ねている。また、両者ともにヴィーン文化協会自由同盟の重要人物として挙げられている⁴⁵。

2.2 反教権主義の世界観

一元論同盟の方針が「学校教育と教会の分離」を説いていたように、社会民主党やドイツナショナルがキリスト教社会党に対抗していた理由の一つは、当時カトリック教会が学校教育に干渉できる制度になっていたことにあった。1868年の学校宗教法、1869年制定の帝国学校法は、全ての子供に宗教道徳を受けさせる義務を定めていた。キリスト教あるいはユダヤ教のいずれかの選択は可能だったが、司祭が学校で礼拝や道徳の授業を行うのが常であったため、教会が学校に干渉し、カトリックの世界観を子供たち

に強要することになっていた⁴⁶。

したがって、社会民主党が勢力拡大を行い、カトリック教会の力が強い地方に本格的に進出する際には、その神による支配という世界観が妨げになっていたのであった。社会主義に合致する世界観が求められ、それを提供したのがフライデンカーだったのである。

また、1908年に社会民主党が採った路線は、反教権主義の態度を強化し、支持層を「ブルジョワだが、反教権主義の担い手である新しい中間層、勤労者や公務員」に広めようとするものであった⁴⁷。そのきっかけとなったとされるのは、1907年の帝国議会議員選挙後、取り上げられた「ヴァールムント事件」⁴⁸である。1908年1月18日インスブルックにおいて、ヴァールムント Ludwig Wahrmund 自身が支部長を務めるフライエ・シュレー協会⁴⁹で行われたローマの

⁴⁶ Boyer, pp.175-177.

⁴⁷ Boyer, pp. 204-206; K.Mann (=Otto Bauer), Bourgeoisie und Klerikalismus, in: *Der Kampf*, Jg. 1, 9.Heft, 1. Juni 1908, S. 386.

⁴⁸ ヴァールムントは教会法史の学者で、1896年からインスブルック大学法学部で教えたが、後に宗教そのものを「幻想」とであると主張するようになり、教会と争うことになった。かれは、その争いで学問・思想の自由を主張し、神学の領域にこの自由をどこまで入れることができるのか、学問的研究と政治的論争の境目は一体どこにあるのか、といった問題を公の場に持ち出すことになった。カトリック側はかれの解雇を要求するが、マサリクや社会民主党はこれに反対し、結局、かれは1909年秋学期からブラハ大学に転任することになった。Cf., Boyer, pp. 191-196, 201.

⁴⁹ オフナー Julius Ofner により設立されたもので、「自然の友」会員であるベルナーストルファー Engelbert Pernstorfer やザイツ Karl Seitz もフライエ・シュレーの賛同者となっている。キリスト教社会党やカトリック教会による宗教教育に反対する言論活動を行い、モデルスクールの授業を開始し、カトリックの教理問答に対して挑戦とも思われるような倫理道徳を教えていた (Boyer, p.177)。「自然の友」協会は1907年度フライエ・シュレーに寄付金を10クロネ送っている (NF, 1907, Rechenschafts

フト)、婚姻改革協会等が含まれていた。社会民主党員が多かったが、党の組織ではなかった (Sertl, S. 115-116)。

⁴⁴ 専科教師、フライデンカー、オーストリアフライデンカー同盟 (1921年再建)の幹部を務めたが、内紛から1923年カラロを中心に「フライガイスト 自由な世界観のための協会」を設立。「自然の友」誌に長期にわたって自然科学の文章を記す。Cf., Sertl, S. 36.

⁴⁵ Sertl, S. 116.

神学が時代遅れであることを主張した講演「カトリック的世界観と自由な科学」をきっかけにして学問や思想の自由へのカトリック教会の干渉が明白になると、社会民主党はヴァールムントを支持し、党内での論争を経て、その支持層である知識人やホワイトカラーに訴える戦略をとり、反キリスト教社会党の姿勢を明確に打ち出したのであった⁵⁰。

しかしながら、社会民主党党首アードラー、レナーKarl Renner、エーレンボーゲン Wilhelm Ellenbogen ら指導層はフライデンカーの思想を世界観として採用することには反対した。1889/89 年諸派を統一したハインフェルト大会で社会民主党は、「国家の教会からの分離」と「個人の事柄としての宗教」を原則としてあげており⁵¹、個々人の宗教や世界観には立ち入らず、教会からの脱退を促すことはない。その態度は一貫しており、第一次世界大戦後、1925 年党大会や翌 26 年のリンツ綱領においてもバウアー Otto Bauer は「宗教は私的な事柄」だと主張している⁵²。これは社会民主党の基本方針でもあったが、とりわけカトリックの勢力が強い地方の農村に社会民主党が進出し、階級闘争に訴えて、その支持を得るためには、宗教替えや教会からの脱退を主張するのは、得策ではないと考えられていたのである。それゆえ、社会民主党

には宗教の如何に関わらず入党できるというのが原則であった。

「自然の友」協会もちろん反教権主義的な文章を『自然の友』誌に掲載するが、批判記事の数は少なく、時期的にみても分散している（『自然の友』誌分類表参照）。内容は宗教そのものを批判するというよりも、むしろカトリック教会の思考方法や行為を半ば揶揄するものが多い。例えば、「カトリックは女性がソリに乗るのを禁止している」⁵³、「日曜日は教会に行くべきであるから、青年たちはヴァンダーンをしてはいけない」⁵⁴、「司祭は半ズボンをはいてはいけない」⁵⁵といったことを主張するカトリックを、編集部が「愚かである」と述べ、司祭を「坊主Pfaffe」という蔑称で表現する程度である。「自然の友」の活動と矛盾するような行為や考えをカトリック教会が行う場合に、批判するだけであり、とり立てて教会に攻撃をしかけるようなこともなく、カトリック教会からの脱退を促すこともない。一方、こうした傾向とは異なり、積極的にフライデンカーの世界観を構成する自然観察・自然科学の記事が、同時期に増加しているところから考えて、反教権主義的な批判より、カトリックの世界観に代わるものを提示する方に力点が置かれていたといえるであろう。

とはいえ、「自然の友」協会を含めて、フライデンカーの思想やその活動が党によって禁止さ

Berichte der Zentrale, S. 238).

⁵⁰ Boyer, pp. 209-211.

⁵¹ Steger, S. 39, 93-95.

⁵² Ibid., S. 197/258; Österreichische Parteiprogramm, S. 258-259.

⁵³ NF., 1905, Nr. 2, S. 18.

⁵⁴ NF., 1912, Nr. 8, S. 228.

⁵⁵ NF., 1913, Nr. 8, S. 233.

れるようなことはなかったのである。

2.3 「自然の友」によるフライデンカー思想の採用

1897年7月の発刊以来、『自然の友』誌には自然観察のエッセイが随時掲載されている。創刊号の緒言から、ツーリストティック⁵⁶以外に、私たちが行う主要な活動は自然科学の知識を広げ、その知識を持った人間を育て、誤謬から真実を導き出すことである、と唱えられていた⁵⁷。同じ号の「8月の自然の友」と題した随筆では、8月には日が短くなること、毎年同じ時期に流星がやってくることを述べ、神が地球のサイクルを司っているのではないことを仄めかす⁵⁸。翌年1月号からは編集長ハピッシュが自ら毎月の自然観察記を掲載し、5月号では「…自然の法則を読むための大きな読書室ではあらゆる所で花が満開だが、ヴァンダーンをして[知的]空腹を感じたものだけがそれを解読できるのだ」⁵⁹と描いて、自然観察をしながらヴァンダーンをするように説いている。自然が自然の法則に基づいて支配されているのだという一つの世界観を『自然の友』は提示していたのである。

『自然の友』に描かれている自然の法則は、自然の遷移・循環や進化、生存競争⁶⁰などの具

体的自然現象を観察することにより明らかになる法則を指している。そうした理性に基づく法則に支配される世界があることを学び、その法則を現実社会に適応させ、そこでのさまざまな現象を理性的に理解し判断することが重視されていた。したがって、この世界観は自然科学を全面的に肯定し、その発展から得られた工業・技術も認容する。当時の先進科学であったダーヴィニズムに基づく生存競争において労働者が勝利し、社会的上昇をはかるために、また、社会の大きな問題を解くために自然科学を学ぶ必要がある⁶¹、と主張していたのであった。

さらに、自然を宗教的に捉えるという特色も表れた。それはキリスト教的世界観に馴染んでいた当時の人々に自然の事象をわかりやすく伝えるための手段であり、同時にキリスト教的世界観への対抗のためにも利用されていた。会長ロウラウアーも「労働する民衆に素晴らしい自然の聖堂の中をヴァンダーンする機会を提供すること」が協会設立時の目的であった⁶²、と述懐して「聖堂」という表現を用いている。これは自然を聖堂と表すことで、聖堂に行った際に受ける荘厳な雰囲気と同じものが自然にはあるのだ、と読む側は理解しえたことを示している。

また、カトリックへの対抗を意識して同様な表現を使っていた例には次のようなものがある。

⁵⁶ 登山や徒歩旅行、ハイキングなどの総称。詳細は第三章第一節を参照のこと。

⁵⁷ NF, 1897, Nr. 1, Zum Beginn, S.1.

⁵⁸ NF, 1897, Nr. 1, Der Naturfreund im August, S. 2.

⁵⁹ NF, 1898, Nr. 5, L.H. (=Leopold Happisch), Mitte Mai bis Mitte Juni, S.27.

⁶⁰ ハピッシュにより生存競争の話題が触れられている(NF, 1898, Nr. 3, L.H., Mitte März bis Mitte April, S. 15)。

⁶¹ NF, 1911, Nr. 1, S. 16-17, Lehrer Angelo Carraro, wissenschaftlicher Leiter der Sektion, Tourist und Naturekunde. Einiges über die Aufgaben und Ziele der Sektion für Naturfreunde in der Ortsgruppe Wien.

⁶² NF, 1904, Nr. 8, S. 102.

精霊降臨祭に教会に行かずに、代わりに山へいく協会員は、「我々アルピニスト」は「救済の母から生まれた唯一の出来の悪い息子たちである」と断りながら「地下の小部屋や納骨所の腐った埃っぽい空気の中で祈るのではなく、自然が我々のために造ってくれた祭壇である高みに立ち、我々は誇りをもって、これが正しいことであると十分に自覚して生き、より楽しむことができる」⁶³。この文章は、宗教行事の際に教会に行かず、登山に行くことの言い訳を表していると同時に、山へ行く自分たちの選択が正しいこと、自らが「啓蒙された者である」ということを、誇りをもって訴えた、と解釈できる。

登山記のなかには、実際に身体的に困難を伴う登山を行い、頂上に立ったときの喜びを「敬虔の念」であり「深い感動」である、と主張する場合がある。しかし、その際もまた「私はどこにいるのか、世界とは何か」を問い、「大きくあたりを見回して、光と(善悪の)判断 Erkenntnis を求めて、苦しむ人間世界を開いていく。そうして頂上での喜びは光の喜びとなる」⁶⁴と主張している。光とはもちろん啓蒙によってあきらかになる真実であり、真実を知ること善悪の判断がつくようになる、と考えられていたのである。かれらにとって自然を神聖視することさえ理性による現実社会への理解を高めるためのものだったのである。

こうして「自然の友」協会は、当時のオーストリア社会にあったキリスト教の世界観に代わり得る世界観をフライデンカーに求めることになった。それは合理的自然科学による社会についての理解を教示するものであり、党の世界観にこそならなかったが、進化論的発想も有し、社会主義の考え方に一致したものだったのである。

3. 「自然の友」協会のツーリズムー博物学との結合

3.1 ツーリズムと自然科学

3.1.1 ツーリズムとは

本稿で用いるツーリズムという言葉は、オーストリアやスイス等、アルプスに比較的近い地域における登山者の間で利用されていた独特の用法で、当初ツーリズムが鉄道網の発展と共に高山を訪れる登山者によって進められたところから、専ら山岳ツーリズムを指している。ツーリストックという言葉が、登山、遠足、徒歩旅行などの総称として用いられるのに対し、ツーリズムはツーリストックに関係する経済的・政治的・文化的事象を全て含み込む概念として利用されている。また、本稿のように、ツーリズムが山岳ツーリズムを意味する場合、ツーリスト⁶⁵という単語は現在の意味や用法とは異なり、

⁶³ NF, 1905, Nr. 1, S. 1.

⁶⁴ NF, 1913, Nr. 6, Camaro, Gipfelfreuden, S. 165.

⁶⁵ 登山はイギリスの貴族の子弟が、グランドツアーの一貫として始められ、その後ブルジョワたちにより模倣されたことから、エリート的な意味が加わった。Cf., Kriemhild Kapeller, *Tourismus und Volkskultur. Folklorismus-Zur Warenästhetik der Volkskultur. Der*

単なる観光旅行者ではない。かれらはヨーロッパの貴族や教養市民層、ブルジョワジーによって作られたツーリスト協会に所属し、登山の作法を体得し実践する人々であった。ツーリスト協会として認められる、あるいは、ツーリスト協会に属すということは一つの名誉であり、少なくとも協会は一般のハイカーAusflugerとは異なる存在であることを主張するのが常だった⁶⁶。「自然の友」の指導層もツーリズムを促進させ、自らの協会が自他ともに認めるツーリスト協会となることを願っていたのである。

3.1.2 ツーリズムの発展過程

ヨーロッパ大陸において、登山自体を目的とした登山が開始されるのは18世紀半ば以降のスイスである。イギリスの貴族やブルジョワジーがアルプス西部を制覇し、その矛先を東に向け、19世紀半ばにオーストリアの東アルプスに到達した。この頃までには、スイス、フランス東南部、イタリア北部、ドイツ南部やオーストリア等アルプス山脈に近い地域にも登山が広がり、1860年代にツーリスト協会の設立がはじまる。二重君主国においては、1867年の結社法成立前後から、専ら貴族・教養市民層・ブルジョワジーたちによって都市部に協会が結成された。例えば1862年設立のオーストリアアルペン協会は、1874年にドイツアルペン協会と合併し、

ドイツ・オーストリアアルペン協会となる。その協会は、潤沢な資金をもち、高山に最多の避難小屋をもつ最大の協会であった。その他いくつかのツーリスト協会が、産業社会の進展とともに、徐々にその会員層を厚くしながら成立し、90年代に、手工業者、職人、勤労者、熟練労働者なども自らツーリスト協会を設立するようになる。こうした協会は小さなサークルも含めて1910年にはウィーンに約210あった⁶⁷。

イギリスのアルパインクラブは貴族・ブルジョワジーの中で高山への登山経験がある者のみから構成されるエリート組織であった。かれらは、専ら高山のあるヨーロッパ大陸に遠征して登山を行い、現地でガイドを雇い、数ヶ月にわたる登頂を行った。それは裕福な貴族的性格を有していたため、登山道や避難小屋などの設置や協同作業を行う必要はなかったのである。しかし、アルプス山脈を有するヨーロッパ大陸諸国で設立されたツーリスト協会は、山地でのインフラ整備を行う必要があったため、地域の経済発展や政治との関わりが生じ、一種の利害団体としての性格をもつようになっていった。

3.1.3 ツーリスト協会の業務

ツーリスト協会の主たる業務のうち大切だと考えられていたのは、登山を行う会員への各種サービスの提供である。そのなかで最も重要なのは、登山道や避難小屋の設置運営であった。会員から会費や寄付金を募り、山林の所有者か

Beitrag zur alpenländischen Folklorismusforschung am Beispiel des Vorarlberger Fremdenverkehrs mit besonderer Berücksichtigung der Regionen Montafon und Bregenzerwald (Graz, 1991), S. 45-50.

⁶⁶ 参照、拙稿「『自然』による啓蒙」、296-299頁。

⁶⁷ Peter Sova (Hrsg.), *Alpinismus in Wien* (Wien, 1999)から計算。

ら土地を買収あるいは借り受けて道路を造り、道路標を付け、避難小屋を造る。つまり、形態はさまざまあったが、山林一帯を法的に所有し、そこを開発するという事業であった。資金のない「自然の友」協会は当初、独自の道や小屋を所有できなかったために、大きなツーリスト協会が道路標付けや小屋建設を行う際、寄付金を出して利用を許可してもらうよう取りはかっていた。しかし、「自然の友」協会に対して避難小屋料金を半額にする会員割引を適用するブルジョワツーリスト協会は少なく、「自然の友」協会の指導層や高山登山を行う会員のほとんどがブルジョワツーリスト協会にも所属し、それらの避難小屋を利用している。

「自然の友」はまた、ツーリスト協会として承認されるために、登山者全体への利益供与という点から道路や小屋の所有が必要だと考え、独自に努力していた。設立当初から道路整備や小屋建設のための資金集めを行い、立地条件のよい場所を探し、1902年にオーストリアツーリストクラブ⁶⁸からシュニーベルク地域のヨハネスバッハクラムを譲り受け、はじめて架橋や道路標付けを行い、遊歩道を作った。また、1907年夏にはインスブルックのパダスターヨッホに避難小屋を設立する。これは、それまで小屋を所有できずに、専らブルジョワツーリスト協会の小屋を利用するという従属的地位にあった

「自然の友」が一步前進したことを示していた。それは、意図的に高山に置かれたこの小屋を他のツーリスト全体に提供することを意味しており、一人前のツーリスト協会としての役割を積極的に担う意志があることを宣言するという行為でもあった。

3.1.4 「自然の友」における自然科学学習

アルプスへの本格的な登山は主として学術的調査を目的に始まる。そのためドイツ・オーストリアアルペン協会の雑誌は自然科学的内容の論文を含んでおり、それらを理解し、また学ぶことが、ツーリストとして当然の義務としてみなされていた。

したがって、ツーリスト協会であることを望み、道路の敷設や小屋の設立などで努力をしていた「自然の友」協会も、自然科学の学習は重視していた。既に前章でみたように、『自然の友』創刊号の緒言以降、雑誌には随時自然観察の記事が掲載されている。しかしながら、『自然の友』誌分類表の「自然観察」の項をみると、一度1904年に記事が増えるが、それ以降、一年に数回に減少する。また、1897年9月ヴィーン本部に自然科学部門が設けられ、指導層が教師になって植物学の勉強会が始められるが、実際に開始されたのは、1900年になってからであり、しかも月に一回、第一金曜日、協会の夕べという娯楽会の終了後になされていただけである⁶⁹。これらの点から、設立初期、自然科学学習を行

⁶⁸ 1869年に設立されツーリスト協会で、官僚や勤労層、工房経営者などからなり、中小規模の山地を開発した。

⁶⁹ NF, 1900, Nr. 3, S. 26.

う意向はあったが、実際にはあまり実施されず
に終わったと考えてよいであろう。

ところが、1909 年以降、「自然観察」の記事
は急増する。それは、1909 年 10 月末にヴィー
ン支部で行われたシュミードゥルによる「近代
人と自然」と題する科学史についての講演を契
機に、博物学部門が設置され、博物学の学習を
前面に押し出したことに拠っていた。この博物
学部門開設の知らせが「はじめに」であげたプ
ログラムであった。

「自然の友」協会の設立者シュミードゥルは、
自然科学の合理的世界観を有するフライデンカ
ーの教育者で、自らも教職に就きながら、教師
向けの教育機関や博物館、研究所に通い、知識
や思想を研磨していた。また、教師仲間や上司
からは反対を受けながら、学校の授業とは別に
子供たちを観察学習に連れて行ったり、労働者
向けの講演を行うなど民衆の啓蒙活動に積極的
に携わっていた⁷⁰。シュミードゥルは社会民主
党党员ではあったが、小学校教師として公務に
就いていたために、「自然の友」協会の設立者集
団には入らず、創設のみ行っただけで、運営に
も、『自然の友』誌の編集にもほとんど関わらな
かった。「自然の友」設立以前に、その行動が警
察当局から咎められたことがあったシュミード
ゥルは党の組織や活動に関わる行動を差し控え

ていたのである⁷¹。しかし、普通選挙施行後、
会長ロウラウアーが言うように「オーストリア
は、自由な法律は欠いていた」が、「自然の友」
会員のペルナーストルフアーが帝国議会副議長
になって以来、集会には官憲が姿を見せなくな
るといったことが起こっていた⁷²。シュミード
ゥルの名前も偽名 Fabricius Bauer ではなく、本
名が雑誌に掲載されるようになる。そして講師
としてかれの名が示されたのが 1909 年 12 月号
に掲載された講演記録であった。したがって、
その講演はシュミードゥル自身の科学史につい
ての見解をはじめて『自然の友』誌において公
にしたものだったともいえる。

3.2 博物学部門の設置とカラロの起用

3.2.1 博物学部門の設置からペーハースドルフ アーの自然保護論へ

1909 年 10 月 26 日ヴィーン支部で開催された
シュミードゥルによる講演「近代人と自然」⁷³は、
宗教と人間の歴史を古代から説きおこしたもの
であった。人間の弱さを救う役割を持っている
のが僧侶であり、宗教であったが、同時にそう
した存在は人間がものを自由に考え、みること
を妨げてしまった、と述べられている。かれは、
キリスト教全般を批判し、ダーウィン・マルク

⁷⁰ Leopold Happisch, Geschichte der Naturfreunde 1895-1934.
Unveröffentlichtes Manuskript (Wien, 1936-1940), S. 218.

⁷¹ Gerald Schügerl, 80 Jahre Naturfreunde Österreich (Wien, 1975), S. 35-37.

⁷² Protokoll der V. Konferenz des Touristenvereins "Naturfreunde".
Unveröffentlichtes Manuskript, 1908, Innsbruck, S. 44.

⁷³ NF., 1909, Nr. 12. Fachlehrer Georg Schmiedl, Wien, Der moderne
Mensch und die Natur. Vortrag gehalten in der gründenden
Versammlung der <Sektion für Naturkunde> in der Ortsgruppe Wien,
26. Oktober 1909, S. 272-274.

スによる発展思想が勝利したことによって、近代人は僧侶や宗教といった「精神的後見人」から解放され、自らの足で生きることが出来るようになった、と主張する。諸科学により、事実が確定され、宗教史の素朴な世界創造の説明は捨て去られた。科学こそ近代的で合理的な思考と論理を導き出す鍵であり、自然観察によって得られる思想こそが近代社会を動かす力なのである、と説くのである。この講演は世界が神によってではなく、理性と科学によって支配されるという世界観をもったフライデンカーの思想をシュミードゥルがもっていたことを明示したものであった。そして、それは「自然の友」がそうした世界観をもつ人々が集まる場所だということ、そして「自然の友」がキリスト教社会党とは異なる世界観を有しているのだという宣言になったのである。

自然科学の学習とツーリズムを結びつけようとしている様子が誌面に表れるのが、シュミードゥルの記事から二ヶ月後に掲載された植物学の専門家ペーハースドルファー Anna Pebersdorfer が書いた自然保護論⁷⁴である。ペーハースドルファーの自然保護論は、植物にも感じる力があること、単なる走光性や走地性といったものばかりではなく、喜怒哀楽の感情も有しており、それゆえ植物観察の際には、その点を考慮しなくてはならない、という内容を持つ

ものであった。だが、本稿において重要なのは次の点にある。それは、この文章の末尾に協会幹部のエマーリング Ferdinand Emmerling が以下のように数行書き加えて、この植物論にツーリズムを結びつけようとしたことである。

「こうした啓蒙的内容の記事を協会員が読んで植物世界を学習し、高山植物の保護を行うことこそ、ツーリスト協会の使命である。」⁷⁵

この行為は、植物世界の様子を实地に学び、自然科学的見地に立って自然保護を行うことが、ツーリスト協会に籍を置くエリート登山者としての役目である、と読者に呼びかけたことを意味していた。ここに「自然の友」協会が、自然科学の学習を行ってエリートであるツーリストを養成し、またそういう人々が集う協会であろうとした意図が示されていたのである。

3.2.2 カラロの「ツーリストと博物学」

自然科学の学習とツーリズムの結合を図ろうとする具体的な企画が『自然の友』誌に掲載されるのが 1911 年 1 月号のカラロによる「ツーリストと博物学 ヴィーン支部博物学部門の課題と目標」⁷⁶であった。このコラムが『自然の友』におけるカラロの最初の論考である点、編集長のハピッシュが頼んで論考を書いてもらった⁷⁷と述べている点から、この時期からカラロが「自然の友」協会の雑誌企画に関わりだしたといえるだろう。

⁷⁴ NF, 1910, Nr. 3, Fachlehrerin, Anna Pebersdorfer, Steyr, Naturfreunde. Ein ernstes Mahnwort an alle, die Pflanzenwelt unserer Berge zu schonen, S. 72-74.

⁷⁵ Ferdinand Emmerling, in: Anna Pebersdorfer, Naturfreunde, S. 74.

⁷⁶ NF, 1911, Nr. 1, Carraro, Tourist und Naturkunde, S. 16-17

⁷⁷ NF, 1912, Nr. 7, S. 183.

さて、本稿の主旨に必要な限りで、そのコラムで述べられていたカラロの主張をまとめてみると、次のようになる。

1. ヴァンダラーWanderer（ここではツーリストと同義）は自然に触れる機会が多い故、自然への理解もそれだけ深まる。そのため、自然の研究を行うにはツアーを行っている時が一番都合がよい。真のツーリストこそ自然の研究者になれるのである。組織労働者からなる「自然の友」は、ツーリストティックを通じて国境を越え、兄弟的な同盟を作ることで、社会的に発展し、労働するフォルクの共有財となるだろう。

2. 個別のものから合理的に成りたっている全体という思想が重要である。それは博物学という学問自体に示されている。つまり、博物学を学ぶのは、地質学、鉱物学、植物学、動物学、天文学といった個々の学問を学ぶだけでなく、総合的に自然を理解するためである。それは全体を常に見渡し、自然の所有する知全体を学んで大きな哲学的方向を身につける必要があるからである。体系を知らずに百科全書的な知識のみ有しているだけでは、ものごとに対する興味が失せてしまう。体系を知れば、大きな学問領域内にどのようにして結合する道があるのか、というシステムを認識でき、その思考方法は現実社会にも応用可能である。したがって、労働者が博物学を学ぶことにより、現実社会と学問領域との架け橋を作ることになり、人間社会と文化の発展に役立つのである。

3. 登山や遠足を行う際には、距離や標高、時間ばかりでなく、景観を構成する自然を観察することも大切である。自然科学から生み出される知識、つまり自然の法則を知ることは労働者の社会的上昇のための闘いの重要な武器庫であり、社会の大きな問題は自然科学の土台無しでは解けない。それゆえ、さまざまな学問領域を擁する博物学を学ぶべきである。

こうしてカラロは、博物学部門が多くての会員を得ること、いろいろな博物学部門のリーダーたちが接合して、博物学の内容を豊富にすること、相互に大きな影響を与えあい、様々な支部から参加者を得、相互の結びつきを強めることなどを提案する。そして、次のように抱負を語ったのであった。

「これらを行えば、時代を経て、研究する労働者の学問的インターナショナル本部が「自然の友」協会にできるである。ツーリストティックは自然の知識により完全な教養的価値を得、考えながら自然を観察することによって、はじめて一つの全体 ein Ganzes となるのである。自然は部分だけ理解しても全体を描けない。全体として研究されてはじめて理解され、享受されるのである」⁷⁸。

19 世紀イギリスにおける博物学研究の特徴の一つは、他の学問よりもこの「学問志向の縁者たち」の姻戚関係が密であったことだという。各個別分野に関する情報の往来は特定の家族間

⁷⁸ NF, 1911, Nr. 1, Carraro, S. 17.

にあったがゆえに頻繁に行われ、相互の研究に役立てられていた。しかし、当時は専門家といえども、大学の教授職を得ていたわけではなく、博物館の職員や画家、標本の卸売業者などを務めるアマチュアから構成されたネットワークであった⁷⁹。

博物学という学問自体に内在したこのような傾向から考えても、アマチュアである「自然の友」協会員による博物学の学習を想定し、家族関係と類似させた他の支部との協力連関といった発想を得たとも考えられる。しかし、カラロの発想の独自性は、個別なものから全体を考え、そこで生み出される全体を重視したことにある。全体を重視するというのは、社会主義的思想の要でもある配分の手段や方法において社会の成員全体で共有するという見方、個別の利害よりも、全体の配分の平等性を重視する、という発想にもつながるものである。そして、全体としてのインターナショナルの重要性、そのなかではじめて輝く個別の役割を主張しているのであった。

「自然の友」は1897年以来自然科学の学習を重視し、その学習部門を設置してはいる。しかし、博物学を学ぶようにと、直接、読者会員に勧め、しかもそれを学んで初めて「真のツースト」になれる、と主張した論説はこれがはじめてであった。

カラロはその後、編集部の要請と読者の要望

により、1912年7月号から1925年まで自然に関する随筆を連載する⁸⁰。編集長ハピッシュがカラロに連載を書いてくれるように頼み、さらに読者の希望を募って、それが高い評価を受ければ連載される、と訴えている⁸¹。それ以後も連載希望が多いことを述べ⁸²、この連載に対する編集部の熱意が相当のものであったことが伝わってくる。但し、穿った見方をすれば、読者の要望があれば連載にしようという編集部の態度は、その選択が読者である会員の同意を得て行われたものだという正当性を創り出す行為だったとも考えられる。協会大会において各国の支部から、自分たちの国の記事にもっと多くの誌面を割くようにという要求⁸³がなされているにもかかわらず、カラロの文章は、1913年9月号からそれまで一頁だったものを二頁に増やして掲載したのであった。

カラロの随筆は、例えば、天体や季節の推移についての随想や具体的な自然観察に関するもの、動植物の世界と人間の社会は出来るかぎり自然の法則に従いながらも、自然の法則を踏ま

⁸⁰ カラロの特集は1912年7月号から1915年8月号までは毎月連載(1912年は6回、1913年10回、1914年7回、1915年4回)、1916年1回、1919年1回、1924年3回、1925年2回、そして期間をおいて、最後に一度1932年1/2号には氏名ではなく、イニシアルのみで自然についての随想を寄稿している。

⁸¹ NF., 1912, Nr. 7, Carraro, Rastgedanken, S. 183.

⁸² NF., 1912, Nr. 10, S. 283. 5回読者の連載希望の投稿を掲載するが、その第2回目の投稿には、編集部による註がつき、「この連載希望の他に、ミラノ、ケルン、ベルンとチューリヒからカラロの文章連載希望が来ている、と述べこの連載に対する希望が多いことを記していた。

⁸³ Protokoll der VII. Konferenz, München, 1913, S. 14-15, 45-49, 69-70.

⁷⁹ 『ナチュラリストの誕生』、143-149頁。

えた人間の理性によって運営されるべきであるといった内容を優しく述べるものであった。それはツアーに出かけて自然観察をする際、どのようにしてそれを行えば、フライデンカーの自然思想・理解を身につけることができるか、ということを教授する性格をもっていた⁸⁴。したがって、「自然の友」協会は、この時期、自然の法則と呼ばれる規範を土台におき、自然への態度において、人間の主体性と全体を重視するフライデンカーの自然思想とツーリズムの活動を結びつけ、協会員に示そうとしたのだといえるだろう。

3.2.3 フライデンカー的世界観の選択

1913 年に行われた協会大会では、編集長のハピッシュが「近代的な労働運動に自然科学は必須のものであるが、現在、まだ労働者のなかで、自然科学が顧みられていない。よって、この観点からこれから『自然の友』誌を変えていこうと思っている」「私たちの自然科学に基づいた生命観や世界観を深め、広く労働する大衆に教えていくこと、「感わされることなく精神的に自由な人間になることを求めていく」⁸⁵と述べ、はっきりと自然科学的知識を重視し、自然科学に基づく世界観、つまり、フライデンカーの世界観を教えるのだと、諸支部が集まる大会で明言した。のちに 1928 年には、同じく協会大会で、

当時副会長であったハピッシュがフライデンカーとの活動上の結びつきは否定しながらも、「『自然の友』が行う集会の際には、自然科学に係わるものを行うようにすべきである。自然科学は、教養のためだけではなく、その世界観を形成するものであるからこそ大切なのである。…わたしたちはフライデンカーの考え方を一つの手段として評価している。それは、そこから生まれる世界観に行き着くため、自然現象と世界観との関係を知るためである」⁸⁶と述べ、「自然の友」がフライデンカーの世界観を手段としてではあれ、受容していることを示したのであった。

こうして「自然の友」は、ツーリズムとフライデンカーの世界観に基づく博物学の学習を結合させた。それは他のブルジョワツーリスト協会や 1908 年に「自然の友」を模倣して作られたキリスト教社会党の労働者向けツーリスト協会「キリスト教労働者ツーリスト協会 Christlicher Arbeiter-Touristen-Verein」にはみられないものであった。

4. ツーリズムと博物学結合

4.1 ブルジョワツーリスト協会対策

4.1.1 「自然の友」への政治性批判—インスブルック決議とアルピナ問題

1907 年の普通選挙実施後、党の組織強化政策を受け「自然の友」協会は 1908 年インスブルッ

⁸⁴ カラロの文章は多くのツーリストに「じっとみる」機会を与える、という読者の感想が述べられている (NF, 1912, Nr. 8, S. 229)。

⁸⁵ Protokoll der VII. Konferenz, München, 1913, S. 43.

⁸⁶ Protokoll der XI. Konferenz, Zürich, 1928, S. 19.

クで行われた協会大会で「インスブルック決議」と呼ばれる秘密原則を決議する。それは会員になるものには黨員になるように促し、また幹部は黨員に限定する、という内容をもつものだった⁸⁷。この秘密決議はそれまでの「自然の友」が、ツーリスト協会は「非政治的」であるべきだとするブルジョワツーリスト協会の不文律にしたがい、政治的活動を行わない、とする態度を覆したことを意味していた。そのために、ブルジョワツーリスト協会との間に軋轢が生ずる。

翌1909年、このインスブルック決議が外部にもれ、スイスアルペンクラブから「中立であるべき山に政治を持ちこんでいる」という批判文書が協会誌『アルピナ *Alpina*』に掲載される⁸⁸。

「自然の友」はそれを『自然の友』誌に転載し、次のように反論した。「わたしたちの多くが社会民主党黨員であり、党の綱領も支持している。しかし、ツーリスト協会が政治的協会であり、政治的な方法で目的を追求していると考えるのは誤りである。労働者は十分に政治団体や組合をもっており、そういうところが階級の利害を代表しているのである」⁸⁹。つまり、社会民主党の協会であることは認めるが、しかし政治的活動はしないのが「自然の友」であると訴えるのである。

当時、「自然の友」協会のスイス諸支部の会員

で登山を本格的に行う者は、避難小屋利用の待遇差からスイスアルペンクラブにも所属していた。また、この頃「自然の友」協会がスイスへ支部を拡大していた時期でもあり、政治的であることを嫌うスイスアルペンクラブとの軋轢は避ける必要があったため、政治的活動はしない、と主張したのであった。この時期、党からは政治的活動強化の圧力がかかってはいたが、ブルジョワツーリスト協会との関係を損ねないために、あくまで「政治的活動はしない」と主張したのである。

4.1.2 ツーリストのマナー改善

さらに、博物学を学ばせて「自然の友」協会員の登山に関するマナー違反を改善させようとも指導層は考えていた。ペーハースドルファーの論考が掲載されたのと同じ『自然の友』1910年3月号に「新しい道」と題された論説が掲載される。それは1909年頃からとりわけウインタースポーツを行う人々のマナーが悪く、登山にも記録や業績ばかり追う人々が出現し始めたことについての批判であった。そういう人々を生み出さないよう、また、かれらの心を改めさせるためには、博物学の学習を勧めるのが最善であると考えられたのである。その論説は、自然を観察することにより、人間が他の人間と共にあることを知り、他人の存在を無視して競争をしてはならない⁹⁰、ということを理解するのだ、と述べている。自分の利益ばかりではなく、全

⁸⁷ Protokoll der V. Konferenz, Innsbruck, 1908, S. 42.

⁸⁸ *Alpina*, 1909, Nr. 12, S. 113; Nr. 14, S. 128-129; Nr. 15, S. 135-136; Nr. 16, S. 142-143; Nr. 17, S. 152-153.

⁸⁹ *Alpina*, 1909, Nr. 16, S. 142-143.

⁹⁰ NF., 1910, Nr. 3, Neue Wege, S. 79.

体を考慮することを学ぶ必要を説いたのであった。

また、ドイツ・オーストリアアルペン協会会員で、あらゆるツーリストから尊敬を受けていたギムナジウムの教授で登山家のラマーEugen Guido Lammer による文章がドイツ・オーストリアアルペン協会ニュースレター1910年10月31日付に掲載されたことも大きな意味をもっていた。その論説は、競争的スポーツ登山は本来行われるべきものではなく、それを拒否すべきである、という内容をもつものであった。「自然の友」編集部はこれを1911年3月号の『自然の友』に再録し、「自然の友」もラマーと同じく考えるので、以後競争的スポーツ登山を禁止する、という記事を掲載したのである⁹¹。ラマーによる警告をカラロも「自然の友」も意識していたのであろう。カラロは「ツーリストと博物学」(1911年1月号)において、「距離や標高、登攀坂、時間ばかり」を追うことが重要なのではない、と記述している。当時、人気が高まりはじめた競争的登山を博物学の学習により制止させ、「自然の友」の登山マナーを改善させようとしたのだ、と考えられる。

こうして「自然の友」はツーリスト協会としての活動を円滑に進める必要を踏まえ、博物学を学習させ、フライデンカーの思想を学ばせることで会員のツーリストマナーを改善させること、個々人の利益よりも全体のことを考えると

いう思想を学習させようとしたのである。

4.2 社会民主党への対策

4.2.1 党からの批判

「自然の友」初代会長ロウラウアーはドイツナショナル系オーストリアアルペンクラブに属しており⁹²、また社会問題に関心のあった創設者シュミードゥルは、党内右派のベルナーストルファーとともにヴィーンフェビアン協会を創設し、大衆政党による社会運動とは別の立場から社会問題を解決しようとした小ブルジョワジーのインテリ層であった。こうした人々の存在に加えて、「自然の友」が政治活動や組合活動を行うべき日曜祭日にツーリストティックを行うことについて、設立以来批判が続いていた。それに対して「自然の友」はどういう態度をとっていたのだろうか。

1908年のインスブルック決議がなされた大会において、多くの協会員は、「自然の友」はあくまでツーリストティックの活動に専心し、政治活動をするには反対していた。ある協会員が「自然の友」会員が政治的活動をせずに山登りを行うことを、党員から「労働運動を気の抜けたものにして」と常に言われている」と訴えるが、会長ロウラウアーは「政治的協会であると外部に向けて主張するのはばかげている」と制し、急進的な決議を避けようとしている。

⁹¹ NF., 1911, Nr. 3, S. 20-21.

⁹² Sova, *Alpinismus in Wien*, S. 320. ロウラウアーはドイツ・オーストリアアルペン協会にアーリア条項を導入したピヒルにより「心底ではドイツ(ナショナル)の志操をもつ」と評されている(Eduard Pichl, *Wien Bergsteigertum* (Wien, 1927), S. 129).

そこへハピッシュが、「1908年3月に行われたデモに代えて、同じ日（ウィーンの）中央墓地へ向けてパーティを組んだ。メーデーも同じように行動している。こうした機会に力強く、短いアピールを行う方が効果的である。もし、手を抜くと、ますますスポーツ協会化する。そうすると、ますます〔党との関係が〕緩くなって、ついには冷たい兄弟となってしまう」⁹³と発言し、「自然の友」は独自に政治的意思表明を行おうとしていることを明らかにした。「自然の友」内には政治的であることを嫌う人々もいたが、他方で、党政治を強調する左派もいた。そのなかで、本部が双方の意見を汲み、政治的行動の意志は持つが、それを自らの仕方で行うとして、全体をまとめたのである。

1910年にも上記と同じく中庸を示す編集部が示される。それは、同年8月号掲載されたヴィンガルト F.D. Wingard 博士による「北東シュタイヤーマルクのヴァンダリング」⁹⁴と題する随筆をめぐる問題であった。

ヴィンガルト氏は、北東シュタイヤーマルク地方のドイツ系入植者を「愚直でがさつだが、親切で気のよい人々で、私たちの力の源泉、自然人が蓄えているものを感じる」と褒め、同地の修道院を、ドイツ文化を護った砦、ドイツ言語領域の最外縁で祖国の精神活動を保持した場

所である、と称賛した。これに対して、ある協会員が本部に批判文書を送付する。地域の入植者ドイツ系貴族こそその地の農民や商人を虐殺した人々であり、「文化を護ったという修道院は教権主義の砦であった。日曜の教会の鐘に従う代わりにかれらが集会に来てくれれば、シュタイヤーマルクの真っ暗な片隅に文化と啓蒙という真実の光が差すはずである」とその文書には書かれてあった。それは、『自然の友』誌に掲載された内容が、社会民主党左派の政治活動方向とは異なることに対する怒りであり、またそれを見かねるにも掲載してしまった編集部に対する批判である。編集部はその批判者を「高く評価することはしない」が、「批判者の意見はもっともである」とし、それゆえ「印刷された15行から20行分、生活観を変えていただければ、と思う」とヴィンガルト氏に対し控えめに諭した文章を1910年10月号に掲載したのであった⁹⁵。

しかし、1910年には、このヴィンガルト氏の記事だけではなく、他にもドイツナショナル性を示す記事が存在した。数的にみても、そうした記事は、1910年からそれ以前の倍以上に伸びている（『自然の友』誌分類表参照）。例えば、1910年3月号には、ドイツ語を話せないにもかかわらず、「チェコ語とドイツ語のバイリンガル」と書かれた帽子をかぶったガイドに「騙された」といって非難する記事⁹⁶、1910年7月号

⁹³ Protokoll der V. Konferenz, Innsbruck, 1908, S. 44.

⁹⁴ NF., 1910, Nr. 8, Dr. F. K. von Wingard, Wien, Wanderungen durch die nordösterreichische Steiermark und eine Bergfahrt auf das Ostkap der deutschen Zentralalpen. Ein Prolog der Eröffnung der Wechselbahn, S. 182-195.

⁹⁵ NF., 1910, Nr. 10, S. 248.

⁹⁶ NF., 1910, Nr. 3, S. 129.

には、ヴェンド語由来の山の名前をドイツ語の名称に代えて呼ぶことを推奨するドイツ・オーストリアアルペン協会の記事を転載し、これを肯定する記事⁹⁷などである。

第一章で述べたように、この時期、社会民主党はドイツナショナルやキリスト教社会党との政治的連携から、双方との分離へと方向を変えると同時に、全体党内ではチェコ系とドイツ系の対立が深まっていたときでもあった。1900年以降ナショナルであること、すなわち、二重君主国においては「ドイツ人」であること、あるいは「チェコ人」「ポーランド人」とであると主張することが、一つの政治参加⁹⁸だとみなされた時代であったが、「自然の友」協会もこの時期にいたって、ようやく政治的意思表明をはじめたのだと考えられる。

4.2.2 教育重点化政策への対応

1909年秋以降、社会民主党側による組織化・教育重点政策が行われたことは既に述べたが、その組織改革に「自然の友」も社会民主党のスポーツ文化組織の一つとして、巻き込まれていた。1910年半ばに「教育のための中央局」には、344の協会、会員数87743名が属しており、そこには他の文化・スポーツ協会とともに、これまで党の上位組織には直接所属したことのなかった「自然の友」も加わっている⁹⁹。それは、1909年9月末の党大会で採択された党の組織

化・教育強化策に「自然の友」も応じたことを意味しており、詰まるところ、1909年10月末博物学部門の設置が宣言され、1910年1月からその学習が始まったのは、この政策にしたがったからだと考えられるのである。

「自然の友」はこの時期、ブルジョワツーリスト協会および社会民主党との関係をそれぞれ上手に築いていく必要を認識していた。ブルジョワツーリスト協会に対しては、「自然の友」は社会民主党の協会ではあるが、政治的活動を行わない、ということを明言し、ツーリストとして自然科学的知識をもち、マナーを守る会員を育成し、そういう会員を有する協会であることを示している。もし、それを行わなければ、オーストリアばかりではなく、ドイツ・スイスにも広がった会員の權益を守り、ブルジョワツーリスト協会からの恩恵を維持することもできなくなり、さらには、ツーリスト協会としての立場も危うくなる恐れもあった。しかし、ブルジョワツーリスト協会対策として、自然科学の学習の強化が必要だったのであれば、既にある自然科学部を大きくまた盛んにすれば済むはずであった。だが、そうせずに、博物学部門を新たに設けたのは、カラロの主張にあったように、個々の自然科学の部門をそれぞれ学び、さらにそれを総合して全体を把握するという博物学の学習方法が、当時の「自然の友」の方向性に合致していたからである。つまり、博物学の学習の仕方には、全体を考えることで、他者の存在

⁹⁷ NF., 1910, Nr. 7, S. 174.

⁹⁸ Boyer, p. xii.

⁹⁹ Langewiesche, S. 71.

を重視してマナー違反を改善させることができ、さらには、「インターナショナル」という社会主義的発想を含ませることもできるため、党の組織であることを意識し、党の政策に従ったことを示せるものだったということである。

この博物学の学習とツーリズムの結合という選択は、「自然の友」協会がそれまで重要視していたブルジョワツーリスト協会との関係から、その錘を社会民主党側へずらしはじめたということも同時に意味していた。それは、社会民主党の一組織として、「自然の友」が他の二つの大衆政党との関係を考慮しはじめたことに示されている。

4.2.3 キリスト教社会党との差異

「自然の友」がフライデンカー的世界観を採用したこと自体に、キリスト教社会党への対抗的意識は表れていた。しかし、それだけではない。1913年にはキリスト教社会党に対し、次のように捉えるようになっている。

協会長ロウラウアーが、全支部から代表者たちが集まる協会大会において、定款修正の動議の際に、キリスト教的に組織されたと誤解される可能性があるので、「自由な組織 *freie Organisation*」と入れるべきだ、と発言し、それを全会一致で同意している¹⁰⁰。この様子は、既にみた『自然の友』の反教権主義への単なる揶揄の記事とは異なり、大会での定款修正という重要な案件に関しては、より敏感に反応する必

要があるのだと、指導層が考えていたことの証となる。それでは、ドイツナショナルとの差異はどのようにして見出そうとしたのだろうか。

4.2.4 ドイツナショナルとの差異―「全体(=世間一般)を考慮する」論理―

1913年『自然の友』誌には、北バーメンにあるヘレンハウスフェルゼン *Herrenhausfelsen/Panská skála* という奇岩の保護運動についての記事が数回掲載されている。その運動は1878年に設立された北バーメン遠足クラブ *Der Nordbömische Excursion-Club* が中心となってその奇岩を採石から守ろうとしたものだったが、その自然保護活動に「自然の友」も加わっていた。『自然の友』誌にはまず、「バーメンのハイマート保護」というタイトルで、ヘレンハウスフェルゼンが紹介され¹⁰¹、次いで「自然の友」会員で、後に二代会長となる帝国議会議員のフォルカートがこの問題について議会で質議に立ち、積極的にそれに関わっていく様子を伝えている¹⁰²。

1913年3月に掲載された記事にはこうある。「私たちヴィーン支部の会員であり、帝国議会議員のフォルカートが危険に晒されている天然記念物に注意を払うよう、文書にして公共労働相に渡し、大臣側はそれを確実に受けとった。

『北バーメン民声新聞 *Die Nordbömische Volks-*

¹⁰¹ NF, 1912, Nr. 9, W. Kostomlitzky, Lerher, Wamsdorf, Der Herrenhausberg bei Steischönau in Böhmen. Ein interessanter Beitrag um Kapitel Heimatschutz, S. 242-243.

¹⁰² NF, 1913, Nr. 1, S. 28-29. このヘレンハウスフェルゼンについては1914年8月号まで繰り返して伝えられ総計10回掲載され、最終的に持ち主から地区が購入したところまで記している。

¹⁰⁰ Protokoll der VII. Konferenz, München, 1913, S. 58.

stimme』紙はこのフォルカートの行動を1913年2月1日に詳しく掲載した。2月16日の『ライヒェンベルク新聞 Die Reichenberger Zeitung』には、議員フォルカートの名前は伏せたまま、この非常に重要な案件を内閣に知らせたとしか書かれていなかった。私たちはかつて議員ドーベルニヒ Dobernig とヴァスティアン Wastian と私たちの同志議員が道の通行止めについて議会で質議にたったとき、喜んでわたしたちの読者にかれらの名前を伝えた¹⁰³。というのは、善行、社会全体 Allgemeinheit のための利用を求めるといふことにおいて私たちは、どのような政治的方向であろうと、あまり気にしないからである。しかし、ドイツフェルキッシュの新聞は、重要なヘレンハウスフェルゼンの維持という問題を、社会民主党の議員が取り上げたことを読者に知らせるのを避けたかったのだらう。[私たちの議員の名前を載せることで] かれらの世界観に影響がでることを恐れたのである¹⁰⁴。

この記事で重要なのは次のような点である。まず、これまでドイツナショナルな傾向がある、と党内から批判されていた「自然の友」協会が、『ライヒェンベルク新聞』をドイツフェルキッシュであると名指して批判したことである。

それは、自分たちはドイツナショナルな組織とは異なるのだ、と断言したことを意味している。この場合、「自然の友」が用いた「フェルキッシュ」という表現に含まれているのは、ドイツナショナル系新聞が自分の支持政党およびその支持者のことばかり気にして、それ以外にいる人々のことを考えない利己的な態度¹⁰⁵をとっているということであった。これに対して「自然の友」は、党利よりも、ヘレンハウスフェルゼンという天然記念物を、誰でもがみることができるよう「社会全体＝世間一般」の利用を求めることを優先させているのだ、と主張する。つまり、この時点で「自然の友」協会は、志向は同じドイツナショナルでありながら、「社会全体を考慮する」のが私たちであり、自分たちのことばかり考えているのが、ドイツナショナル諸団体であるという差異を示したのであった。

もう一つは、社会民主党の議員が、ドイツナショナルの議員も関心がある景観保護に関して質議を行ったことにより、ドイツナショナル側にいる「読者の世界観に影響がでることを恐れたからである」、と述べている点である。ここでは世界観の相違が問題となっている。世界観において、キリスト教社会党との相違は、フライ

¹⁰³ かつて「自然の友」協会が中心になって貴族やブルジョワジーによる登山道の「通行止め」に対して抗議し、「自然の友」会員であったエーレンボーゲンが1906年10月帝国議会で質議を行ったのに続けて、議員ドーベルニヒとヴァスティアンとその同志が、内務大臣と鉄道大臣に対して質問したことをかれらの氏名入りで『自然の友』に掲載していた(NF., 1906, Nr. 11, Der verbotene Weg, S. 175-176).

¹⁰⁴ NF., 1913, Nr. 3, S. 80.

¹⁰⁵ その他利己的であるとする内容に近い批判には次のようなものがある。ドイツナショナルのスードマルク(南部辺境協会)が開発した道路の通行や同系の旅館において強制的寄付を募っていることについて、表面では人道的寄付、少数ドイツ系国民体のため寄付としながら、実際にはその背後にある政党が策略を施してその金を吸い上げていると批判している。つまり、一般の人々から寄付を募り、利己的な目的のために利用しているという批判である(NF., 1914, Nr. 8, S. 205).

デンカーの世界観を提示することで済んだが、ドイツナショナルの世界観との相違は、それでは済まなかったのである。そこに利用されたのが「全体を考える」という発想であった。これは自然の法則に基づくフライデンカー的世界観に由来はするが、社会全体を優先し、その成員で利益等を分配する際の手段・方法を共有するという社会主義的思想に通じるものであった。それをドイツナショナルとの差異に用いたのである。

ただし、その「全体」は、カラロが述べていたような「インターナショナルという全体」を志向したものではなく、あくまでドイツ系に限定した「全体」になっていたと考えられる。それはチェコ系住民に対する次のような記事に表れていた。

4.2.5 チェコ系に対する態度

1913年4月号には、「自然の友」協会がドイツオーストリア社会民主党の労働運動を肯定すると同時に、チェコ系労働者やその労働運動を暗に無視する記事¹⁰⁶が掲載される。それはドイツ・フルト支部の会員が1912年、船で上オーストリアに入り、そこからベーメンの森をヴァンダーンした紀行文であった。その会員は、ドナウ川を下る船の乗客たちの会話から、ウィーンやリンツではドイツ系労働者が失業しているなかで、その船のボイラーマンがドイツ系では

なく、チェコ系であることを不満に思っている人々が存在することを知る。そして、二重君主国内に諸国民体の争いがあるということを認識する。さらに会員自身、ベーメンの森をヴァンダーンしたところ、ドイツ語が通じる町もあるが、なかにはドイツ語表記もなく、ドイツ語がまったく通じない町があつて狼狽する。そして、たまたま出会ったドイツ語を話す女性が言っていた「私の犬はドイツ語で吠える」という言葉を実感し、ようやく見つけたドイツ系の宿屋で、「故郷の懐かしさに出会え、安心することができた」といった発言を行う。さらに、同じ地方にあった工場に貼られた〔ドイツ〕オーストリア社会民主党の集会のポスターをみつけ、労働運動がベーメンの森まで来ていることを知る、といった内容である。

この紀行文がドイツ国内の会員により書かれたものであることを差し引いても、ウィーン本部を代表する編集部が、注記もつけずそのまま掲載しているのは、これが「自然の友」協会の立場であることを示したものだと考えてよいだろう。既に述べたように、1912年には、社会民主党内でドイツオーストリア社会民主党とチェコスラヴ社会民主党が分裂した。したがって、「自然の友」協会がドイツオーストリア社会民主党を支持していることを表明するためには、上記のような記事が必要であったと言える。しかしながら、ドイツナショナルとの相違が「全体（＝世間一般）を考慮する」点にあったとす

¹⁰⁶ NF, 1913, Nr. 4, Fritz Endres, Fürth, Von der Donau durch die böhmischen Wälder nach Straubing, S. 92-103

る1ヶ月前の記事から推定するならば、この時期「自然の友」が主張した「全体」とは、あくまでもドイツ系住民に限定されたものであり、チェコ系住民の存在は眼中にない、といえるだろう。

もちろん「自然の友」協会が最初からチェコ系の会員に対して、冷淡な態度をとっていたわけではない。確かに「自然の友」は設立初期の頃からドイツナショナルの祝祭を援護し¹⁰⁷、ドイツナショナルの文化団体であるドイツ学校協会と近いところにいたペルナーストルファーを頼って党や帝国議会で協会の利害を表明させるなど、ドイツ擁護の立場を堅持してきた。しかし、同時に、協会内にチェコ系の会員を有していたのである。

工業化の進展に伴いウィーンには南ベーメンなどからのチェコ系労働者が多く居住¹⁰⁸しており、かれらは「自然の友」協会の会員となり、さらに1905年5月には、かれら独自のチェコツーリスト組合 *Jednota českých turistů* を設立する。それは「自然の友」傘下の登山サークルに含まれており¹⁰⁹、会議の場所や週一回の集まりが水

曜日の夕方に開催されることなどが本誌1905年7月号に掲載されていた。同9月号では、「わたしたちの協会がチェコ人団体を設立したのではなく、「自然の友」協会の会員が設立したものであるが、他の15の「自然の友」登山サークルと同様に、その設立や運営に対してほとんど協会は、影響を及ぼしていない」¹¹⁰と説明しているものの、その後も継続してこのチェコ系登山サークルの記事を掲載する。1907年1月の総会での支部報告には、会員が100名を越えたが、そのほとんどは「自然の友」に属しており、1905年は53パーティで760名の参加、1906年度は60パーティ、のべ650名の参加があった¹¹¹こと、1907年3月号では7月から8月に完成予定の「自然の友」協会初の避難小屋¹¹²に30クロネ寄付をしていること、10月号には二回目のツーリストクレンツヒェン（舞踏会）を1908年3月に開き、1908年前半にはプラハでの産業博覧会への単独列車を繰り出す予定であることが記され¹¹³、1908年10月号のウィーン支部用ニュースレターには、11月にプラハから自然科学者を招請し、チェコ語の講演会を開催する¹¹⁴、といった記事まで掲載されていた。こうして

1908年中はこのツーリスト組合は「自然の友」登山サークルの一員であったことがわかるが、

Gesellschaft と同様の扱いがされている。

¹⁰⁷ NF., 1899, Nr. 5, S. 43; 1900, Nr. 5, S. 43; Nr. 7, 56.

¹⁰⁸ チェコ人が多く住んでいたのは、10区ファボリーテンや郊外区で、1900年当時ウィーンには10万人（国勢調査）が住んでおり、10区には約23000人、同区の総人口の20%を占めていたとされるが、チェコ人側の主張だとほかに多い40万人がウィーンにいたということである。参照、小沢弘明「ウィーン労働者の住体験と労働者文化-「最暗黒のウィーン」から「赤いウィーン」へ-」小沢弘明・佐伯哲朗・相馬保夫・土屋好古『労働者文化と労働運動-ヨーロッパの歴史的経験-』（木鐸社、1995）、152-154頁。

¹⁰⁹ NF., 1905, Nr. 7, S. 90, 「我々の協会のゲゼルシャフトが設立された」と記述され、他にもある「自然の友」系列の *Naturfreunde-*

¹¹⁰ NF., 1905, Nr. 9, S. 122.

¹¹¹ NF., 1907, Nr. 2, S. 39.

¹¹² NF., 1907, Nr. 3, S. 54.

¹¹³ NF., 1907, Nr. 10, S. 206.

¹¹⁴ NF., 1908, Nr. 10, Beilage, III.

1908年10月号以降『自然の友』誌にはこのサークルについての記事が掲載されなくなり¹¹⁵、さらに1909年には「自然の友」は次のような発言を行うようになっている。

1909年8月キリスト教社会党のお抱え新聞『ドイツ民報 *Das Deutsche Volksblatt*』が、「自然の友」協会はツーリストの規範に背く行為をし、さらにチェコ系国民運動を援助している、と名指しで「批判」してくるという出来事が起きる。これに対して、「自然の友」は『ドイツ民報』は最近、ドイツ人の民族性 *Volkstum* を擁護して、誠実であるドイツ人の面目を失わせたのだ」と抗議するのである。つまり、「自然の友」は自らを「誠実なドイツ人」であるとみなし、それにもかかわらず、チェコ系を支援したと「中傷」されたため、抗議したということである¹¹⁶。

この記事が掲載されたのは『自然の友』誌1909年9月号であったが、この夏ヴィーン近郊でチェコ系とドイツ系のナショナルグループの対立が頻発し、その中にはチェコ系ツーリストクラブに対する嫌がらせも含まれていた。9月半ばもすぎると街の騒擾は収まりはしたが¹¹⁷、今度は帝国議会においてコメンスキー学校への国庫助成金に関しての社会民主党内でのチェコ系とドイツオーストリア系の対立が持ち上がる

のであった¹¹⁸。こうした一連の出来事と1910年『自然の友』誌に掲載されたナショナル性を示す発言を考え合わせると、この時期「自然の友」協会は、チェコ系登山サークルに対して距離を置くことによって政治的意思表明を明確化したといえそうである。そして、同年9月末のライヒェンベルク党大会の政策に応じて博物学支部の設立による教育強化策という選択を行い、党の方向に一歩足を踏み入れたと考えられる。

おわりに

1909年秋、チェコ系に対するドイツ系の擁護という形で開始された「自然の友」の政治的意思表明は、シュミードウルの講演からエマーリングやカラロの博物学とツーリズムの結合の試みを経て、キリスト教社会党とドイツナショナルの世界観に対抗する社会民主党の組織「自然の友」協会の世界観を創り出すことになった。それは、社会民主党の国民社会化の統合策に対応するなかで打ち出されたものであった。しかし、同時に博物学を学んではじめてツーリストになれると主張し、会員に博物学を学ばせることで、そのマナーを矯正し、競争的スポーツ登山やウィンタースポーツを禁止する方向をも選んだことを意味していた。そうすることで、ブルジョワツーリスト協会との関係も維持しようとしたのであった。

こうして「自然の友」は当時の社会、「自然の

¹¹⁵ 1911年にこのサークルは一端終了し、1922年に再興され1926年まで存続したが、この時期は「自然の友」の登山サークルには入っていない。P. Sova, S. 147; *Der Gau-Bote*, Nr. 15, Beilage zum "Naturfreund", Heft 1/2, 1925, S. VIII.

¹¹⁶ *NF*, 1909, Nr. 9, 205.

¹¹⁷ Boyer, pp. 222-226.

¹¹⁸ 小沢「オーストリア社会民主党における民族問題」、23頁。

友」を取り巻く党やブルジョワツーリスト協会との関係において、出来る限り自らが有利に動けるような方向を選択する。それが、この時期に「自然の友」協会が有した政治性だったのである。戦間期の政治的対立の社会においても、社会民主党陣営にありながら、敵対するブルジ

ョワツーリスト協会との関係を維持する「自然の友」の態度がはじめて示されたのが、1908年から行われたこの選択だったのである。

(ふるかわ たかこ・東京外国語大学非常勤研究員)

『自然の友』誌分類表

年次	『自然の友』誌の総頁数(1年分×2カ月)	カトリック批判擲論	自然観察博物学*	ドイツナショナルの記事
1897	24		1	
1898	89		12	
1899	99		3	
1900	126		4	6
1901	122		1	
1902	96		4	
1903	130		6	
1904	156		12	
1905	180	2	4	2
1906	208		4	4
1907	248	2	1	3
1908	284		2	3
1909	284	1	9	4
1910	300		14	9
1911	336	1	9	4
1912	335	3	18	10
1913	344	1	28	8
1914	287		19	3
1915	296		14	5

年次	『自然の友』誌の総頁数(1年分×2カ月)	カトリック批判擲論	自然観察博物学*	ドイツナショナルの記事
1916	220		25	2
1917	144		15	5
1918	148		15	3
1919	150		9	2
1920	94		14	
1921	96		11	
1922	91	1	3	
1923	112	2	1	2
1924	164		20	1
1925	198		21	1
1926	235	2	12	1
1927	236		7	1
1928	284		6	2
1929	276		11	2
1930	240		8	1
1931	236		9	1
1932	236		19	1
1933	222		16	
1934	38		4	1

尚、1897年は7月号から、1934年は3月号まで。

*1910年以降は博物学を含む。